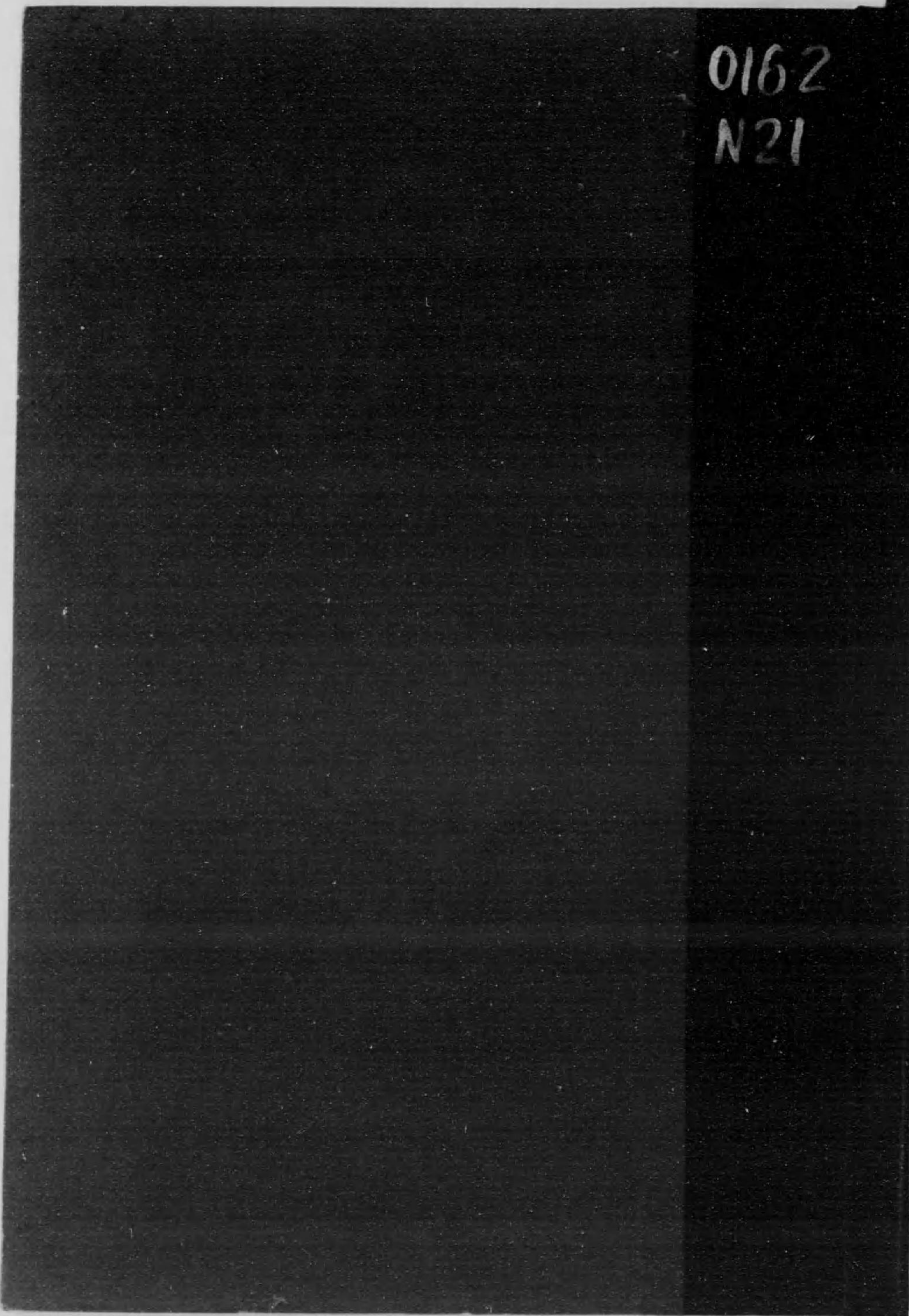


m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

0162
N21

始



278
98

大正十五年二月

長崎圖書館報

第一號

長崎縣立長崎圖書館



目次

一、圖書館を普及擴張するの必要なる所以を論ず……………永山時英……………一

二、圖書館の窓より見たる長崎近時の讀書界……………増田廉吉……………二

三、大正十四年十月十一月の二ヶ月間に最も讀まれたる圖書……………三

四、閱覽人員表(大正十四年中)……………五

五、閱覽人員職業別表(大正十四年中)……………六

六、閱覽圖書冊數表……………七

七、新著圖書目錄 自大正十四年四月……………一九

至全 年九月……………一九

大正 15. 3. 2. 寄贈

寄贈本



圖書館を普及擴張するの必要なる所以を論ず

永 山 時 英

(一) 學校と圖書館は國民教育の兩翼なり

學校は知識の所在を知らしめ、且つ之を獲得するに必要な技能と方法を授くる所であつて、知識其物を授くる所では無い。知識其物は卒業後の自修自學に待つの外はない。故に國家がその向上發展を望む以上は國民に向つて學校教育を受くるの義務を強要するの必要あるは勿論であるが、其の教育の効果を收めんとするには、國民に讀書を奨励し、各自の生涯に涉りて自修自學を繼續せしむるの必要がある。是れ圖書館を普及擴張するの必要なる所以である。

從來は餘り學校教育を偏重した。總ての知識は學校で教授し得るものとのみ考へられた。夫れ故に兒童の頭の研究の素地を作り出すと云ふよりは、寧ろ之に一つでも多くの知識を注入しようと思へられた。今日でも尙ほ少數者の間にはこんな考を持つて居る人がある。是れ教科書萬能主義が謳歌された所以で、學校教育と云へば教科書の暗誦の外にないと思はる、やうになつた所以であつた。かくして圖書は兒童の大多數からは一種の責道具のやうに思はれ、一般からも圖書は學校在學中にのみ必要なものと考へらる、やうになつた。

歐米の先進國でも學校のみが偏重せられ、教科書萬能主義が謳歌されたのは久しい間のことであつた。併し五六

十年前から圖書館運動が起り、教室文庫が送られて、教師が之を利用して自學の風を獎勵し、大にその効を收めてから、教授法が一變した。學校で總ての知識を授け得るものと考へたのは大いな誤謬であつたといふことが一般に承認せられ、學校は單に研究の基礎を作る所であるといふことが動かすべからざる眞理として認めらるゝやうになつた。それで今日では小學校教員の主たる任務は兒童をして地理歴史博物理化其他の教科書に精通せしむることではなくして、兒童に讀書力と讀書趣味とを養成せしめ、之に圖書の利用法を授け、且つ多くの良書を紹介し、卒業の後公共圖書館を利用して自修自學せしめ、各自の一生を通じて絶えず向上せしめんことを期するにありといふ一般に認めらるゝやうになつた。

右の如く學校の教授法が一變せられた結果、各學校では附屬圖書館が出来て、兒童をして圖書に親ましめ、圖書によつて種々の事を自ら研究せしむることが大に流行して來た。そして學校以外にも到る所に圖書館が設けられ、各圖書館では閱覽者に出來得る限りの便宜を與へ、あらゆる方法を設けて閱覽者を圖書館に引付けることを努め、又簡易な館外貸出しの法を設けて、何人でも居ながら容易に望む所の本を手に入れることが出来るやうになつたので、國民の讀書慾はすばらしく旺盛になつて來た。地方の村落でさへ居住民の總人口の半數以上が圖書館から館外貸出の特許を受けて盛に讀んで居る實例さへある。

右の如き次第であるからして、歐米の先進國では、國民教育は教會を底邊とし、學校と圖書館とを他の二邊とする二等邊三角形を畫くにあらざれば、その目的を達すべきものでなく、學校と圖書館とは國民教育の兩翼であつてその一を缺けば國民性の向上といふことは決して期待し得べきものでないといふことが一般に認められて居る。夫

故に圖書館に對する彼等の熱心の度は學彼に對するに何等異なる所がないのである。

我國でも學校教育者の間に近比は自學といふことが大に唱道せらるゝやうになり、教科書萬能主義が段々下火になつて來た。之は大に喜ぶべきことである。併し學校附屬圖書館が盛にならなければ此主張を徹底せしむることは不可能である。そして公共圖書館が普及せざれば、學校で折角養成した自學の學風もその効果を收むることが至難である。それで我國の學校教育界でも圖書館の必要といふことは追々痛切に感ずるやうになるに相違ない。若しそうでないといふれば學校教育者は眞に國民教育の重任を双肩に負ふて立つものといふは云へない。

(二) 圖書館の普及が特に今日必要な所以

圖書館は如何なる時代にも必要である。去ながら吾々は今日の我國の現状に於て特にその必要を感ずるものである。

昔の如く隨意就學の時代と、今日の如く義務就學の時とは學校兒童の素質に大なる差異があるといふ事實が特に今日圖書館の必要がある第一の原因である。

昔の學校私塾若くは寺小屋の兒童はその父兄が是非教育を受けさせたいと思つたものか、又は兒童自らか進んで學ばんと志したのみであつた。少くとも遺傳的に向上の精神あるもの、みであつた。そして彼等は卒業證書を最終の目的として就學したのではなかつた。彼等の目的は實力の養成であつた。それで學校を出で、後も或程度までは自修自學を勉めたので、教授法は不完全であつたけれども皆相當の成績を收むることが出來た。

今の就學兒童は本人は勿論父兄に於ても何等向上の精神あるなく、只強要せらるゝが爲めに已を得ず就學するものが大多數を占めて居る。彼等の最後の目的は六年の義務を果すにある。少くとも一枚の卒業證書を得るにある。自己の修養と實力と云ふことはその目的でないものが多い。夫故に立派な校舎内で、立派な先生から、巧妙な教授法で六年間の教育を受けた兒童も、上級學校に進まないものは、學校卒業と同時に全然書籍と絶縁し、自修自學なきいふ考は樂にしたくても持合せのないものが多い。こんな有様であるから卒業後は一寸も進歩を認むることが出来ぬばかりでなく、教はつた所の知識も年一年に忘却し、壯丁検査の頃になれば無教育者と何等異なる所なきものが多々ある。

事情右の如くであるからして、今日の急務は在學中には教育者が大に力を讀書趣味の養成に用ゐ、之に圖書の利用法を授け、多くの良書を紹介するに全時に、到る所に圖書館を普及し、あらゆる方法を盡して成るべく多くの人を圖書館に引付けることを勉め、來館者に對しては成るべく多くの利便と興味とを與へ、讀書趣味の養成に力を用ふるにある。然らざれば到底國民教育の目的を達することは出来ぬ。昔と全様に考へて學校で教育をして置きさへすれば、自然各自が自修自學して一生涯の内には多少の向上をするであらうと思つて居つては飛でもない間違である。一步進んで圖書館は必要であるを考へても、圖書館さへ作つて、圖書さへ備へて置いたならば、自然讀みに來るであらう位に思つて居ても、今日の現状ではだめである。圖書館には適當な人材を得て、圖書館の方から進んで讀書を奨励し、之を誘引するでなければその目的を達することは出来ぬ。

次に今日特に圖書館の必要な理由は政治上の一大變化があつたといふことである。

昔の哲人政治の時代では、國民全體の教養の良否は國家の盛衰には餘り多くの關係がなかつた。民をして従はしむべし、知らしむべからずといふやうな方針で政治が行はれた時代には、國民の智育といふやうなことは寧ろ有害であつたかも知れぬ。少數の人を善く教育してその内に一二の雋傑が出来ればそれで結構であつた。こんな時代には圖書館の普及なきいふことは決して必要でなかつた。

併し立憲政治の今日に於ては、國民の教養如何は直に國家の隆替に關係する。それでも國民の或一部分が國政に參與する間は下層民衆の教育といふことは餘り大切でなかつたが、普選實施の曉には國民の教養は國家の盛衰に至大の關係がある。民衆が愚であつたならば、民衆の輿論は常に煽動者の詭辯によつて動かされ、穩健なる正論はその勢力を失ふて、國家は遂に自滅するの外はないことになる。

今日我日本の隆運を呪ひ、その滅亡を企畫しつゝあるものは決して彼の猶太人の秘密結社のみでない。日本の産業を衰頽せしめ、乃至は日本國民の思想を攪亂せんが爲めに外國から巨額の金品が年々我國に輸入されつゝあることは殆ど公然の秘密である。又よしんば外國の金とは關係なくとも、心にもなき言行を弄して民心に迎合し、民衆の愚昧を奇貨として煽動を事とし、以て私利を營むに汲々たるものも亦決して少くない。是時に當つて民衆に教養なく、従つて善惡利害を靜に批判するの力がなかつたならば、國家は遂に自滅するの外はないことになる。

又世界の大勢から考へても國際關係の非常にデリケートになつた今日に於ては特に圖書館普及の必要を感ずるのである。

世界の一等國といはるゝ國々は我日本を除けば外は皆八年乃至十二年の義務教育を國民に強要して居る。そして

彼等の國々では總ての文章は僅に二十六文字で容易に之を綴ることが出来る。従つてその教育の難易は我國と歳を全ふして語るべからざるは勿論である。夫故に彼の國々に於ける義務教育修了者の學力が我國のそれに比して遙に優良であるべきは言を待たぬ所である。それにも拘はらず、彼の國々では學校は知識の所在と之を求むる方法及技能とを授くる所であることを明に認識し、圖書館を天下に普及し、學校と圖書館とは手を携へて國民の讀書趣味の向上に努力し、國民教育を各自の一生涯に延長せんことを努めて居る。

之に反して我國の文字教育は誠に困難である。最上級の學校を卒業したものでさへ、尙ほ文字の解釋に困るといふ有様である。此點から見れば、我國の義務教育年限は歐米先進國のそれよりも遙に長くなくては全一の効果を収むることは出来ぬ筈である。然るに我國の義務教育年限は英國のその半分、即六ヶ年である。それで以て國民教育の目的を達せんとするには、卒業後の自修自學を大に奨励することにせなければ學校教育は全くの徒勞に歸する惧がある。然るにも拘はらず、我國には義務教育修了者の自修自學機關として何が設けてあるか。補習學校などが設けられてある所もあるけれども、之に收容する人員は誠に少數であつて、その成績も思はしく無いことは一般の輿論である。

かゝる有様で我國が一等國の位地を永遠に維持し得るものといふならば、國民教育の良否は國家の隆替に何等關係ないといふ結論にならねばならぬ。誠に心細き極みである。何はにおいても圖書館の普及發達を圖らねばならぬと吾々が絶叫する所以のものは斯る事情があるからである。

(三) 日本人は果して讀書慾なき民族なるか

圖書館普及の必要を絶叫すれば、吾々が常に聞く所の返事は、「歐米人は讀書趣味の多い民族であるから、圖書館の効果も定めて多いであらうが、日本人の如く讀書慾がなくては豫期の効果を收むることは出来まい、今日の如く財政窮乏の時、無理算段をしてまで作る程のものもあるまい。」といふ云ひ草である。果して日本人は讀書慾の無い民族であらうか。

今日の現状から見れば日本人の讀書慾は無論歐米人に遙に及ばない。併し日本人に知識慾の旺盛なことは和蘭人などが早くから世界に紹介した所であつた。吾々は先輩が苦心をして書籍を求めて之を耽讀した實例も澤山知つて居る。吾々は決して日本人は讀書慾に乏しき民族とは思はない。此等の議論は畢竟するに歐米の先進國が如何に讀書趣味の養成に努力しつゝあるかを知らぬに基因するものと信ずる。

圖書館の最も盛で、讀書慾の最も旺盛な北米合衆國に於てさへ、公共圖書館運動の起つたのは五十年餘にしかならぬ。そしてその始には無用のもの、否寧ろ有害なものといふ批難さへあつたので、圖書館従業者は非常に惡戦苦闘した。併し眞理は最後の勝利者であつて、遂に學校も社會もその必要を認むるやうになつた。併し學校と圖書館とが相協力して立派な成績を收め、圖書館が國民教育の必要機關と認めらるゝやうになつたのは、まだ二十餘年にしかならぬ事柄である。そこになるまでには圖書館と學校とが國民の讀書趣味の養成に努力した苦心といふものは決して並大抵のことではなかつた。そして今でも大に之を努めて居る。

米國の小學校の教育方針が讀書力と讀書趣味の養成に大に力を用ゐて居るといふことは第一節に述べた通りであるが、今では在學八年間を通じて圖書館科といふ時間を毎週一時間づつ、課して居る州は珍らしくない。中等學校から大學に至るまで圖書館學が課せられてある。教員檢定試験にも圖書館學が加へられて居る州が澤山ある。之は上級學校に於て圖書館學を授けなければ、その卒業生が下級學校に教鞭を握る時、生徒の讀書を指導することが出来ぬ、小學校で圖書館科を授けねば社會に出てから公共圖書館を利用して自修自學することが出来ぬからといふ爲である。

米國殊に西部米國の小學校では、圖書館科の時間外でも、授業時間の大部分を兒童の自習に費し、教員は先づ兒童に或る一定の問題と参考書名とを示して自習せしめ、自習の了るを待つて問を發して兒童に正確な知識を與ふることを以て唯一の教授法として居る學校さへある。

又教師は生徒の讀書趣味を喚ぶ爲めに、面白くて有益な文學書類を多く生徒に紹介することを怠らない。そして公共圖書館は多くこの種の本を備付けて居る。公共圖書館の蔵書の八割は小説本で占めて居た時代さへあつた。讀書と云へば必ず堅い眞面目なものでなければ良くないといふやうなことは思はれて居ない。國民の讀書趣味を喚ぶには娛樂的の本も已を得ぬとされて居る。その結果米國の兒童は圖書館を活動寫眞館よりも面白い所と考ふるやうになつた。かくして本に親しむやうに教養された國民が自然一生涯を通して讀書慾が多いのは自然の結果である。

米國では圖書館運動は既に第二期に入り、趣味本位、娛樂本位から實用本位に進んで來た。或圖書館では小説本を借りに行くに、別に一冊の有益な本を貸與へて、さうぞ全時に之も讀んで下さいと頼む。之を two book

system と稱し段々成功しつゝ、あるといふ位である。

米國人が國民の讀書趣味養成に努力することは右の通りである。彼等に讀書趣味の多いのは自然の結果と謂はねばならぬ。然るに我日本人は未だ嘗て國民の讀書趣味養成に努力したことは無くして右に述べたやうなことを考へて居る。誠に思はざるの甚しきものと謂はねばならぬ。

此文を草したるの時、余は鹿兒島縣立鹿兒島圖書館が二十二萬六千圓を投じて大正十五年度に圖書館の改善を行つたことになつたと云ふこと、千葉縣が二十五萬圓を投じて新に圖書館を設けることになつたと云ふことの報知に接した。鹿兒島縣は鹿兒島縣商品陳列所を他に移し、その前庭に二十二萬餘圓を投じて新に縣立圖書館を建て、元の商品陳列所たりし興業館をふ堂々たる石造二階建の大家屋は圖書館附屬の博物館にするといふことであるから。定めて立派な圖書館が出来ることであらう。千葉縣は二十五萬圓を投じて圖書館を新設するに全時に、千葉縣圖書館協會を設けて大に圖書館事業を擴張するといふことであるから、之も亦定めて數年ならずして立派な成績を挙げらるゝことであらう。圖書館界の爲めに誠に喜びに堪へぬことである。余は各地にかゝる快舉が續出せんことを衷心より希望するに全時に、此等の壯舉は余の論旨の眞理なることを裏書するものとして喜びに堪へぬ。

去りながら我長崎縣の現状を思ふ時余は汗顔に堪へぬものがある。縣民各位は果して如何なる感を持たるか。

圖書館の窓より見たる長崎近時の讀書界

増 田 廉 吉

19

最近慌たゞしい思想の變遷と社會運動の勃興とにつれて人心の動搖も甚だしい我が圖書館に於ける讀書の傾向閱覽者の職業別等にもその影響を及ぼしてゐることは論を俟たないと思ふ今その一例を擧げると歐洲戰亂の直後に於て我が國の社會問題は稍過急的にその革命を叫び隨つてその研究熱の如きも稍々不自然だと思はれる程急調なものであつた。

その結果は長崎にも漸時同様の研究熱を煽り當時圖書閱覽者の如き常に大多數を占むる學生間に此種研究者の増加したことは勿論として商工業者の數に著しい増加を來してゐる殊に官公吏中警察官吏にして此種研究者を増加したことはより多く識者の注意を惹起したものである。

常に機を見るに敏である出版業者は此の機に於て盛んに此種新研究の發表に務めた所謂窪田文三氏の現代日本と社會問題、藤原銀次郎氏の勞働問題の歸趨、豊原又雄氏の勞働紹介、伊藤正徳氏の改造の戰、河上肇氏の社會組織と社會革命、森本厚吉氏の減び行く階級、山川菊榮氏の婦人の勝利なき云ふものはその一例であるが隨つてその種圖書の閱覽者も著しく増加を示してゐる。

斯くの如くにして長崎に於ける此種の研究は漸時その緒に就いたと云つたやうな有様であるが未だその研究は根本問題である哲學と經濟とに充分の基礎を持つてゐなかつた隨つてその後には漸時必然的に哲學、經濟の研究

が勃興し特に哲學としても經濟としても實際的に社會問題のそれと密接な關係を多く有するやうなもの、研究に耽けるものが多くなつた。

同時に出版界にも問題そのもの、研究よりも根本思想の研究に必要な圖書の出版が弗々と現はれるやうになつたのである即ち波多野鼎氏のロシア社會學、山川均氏の歴史を創造する力、石川三四郎氏の西洋社會運動史、北上梅石氏の猶太禍、酒井勝軍氏の社會の正體と猶太人なき云ふ如きは同じ研究にしても稍々そのオリヂナリチーの研究途上にあるものとして別に差支ないやうに思はれる。

それと同時に一方には經濟社會學に於て、木蘇數氏の唯物史觀研究、安倍浩氏の唯物史觀と餘剩價值、賀川豊彦氏の主觀經濟の原理なき云ふが如きは正しく單なる問題としての研究以外に一步を進めた現象として見ることが出来るこの現象は延いて文學の上にも現はれ學校教育者としての櫻井祐男氏が生を教育に求めて、社會事業家としての賀川豊彦氏が死線を越えて、書店々員としての江原小彌太氏が新約の如き又石丸梧平氏の受難の親鸞の如き確かに思想上の大革命期に伴ふ產物として取扱ふことが出来ると思はれるやうである。

斯くの如くめまぐるしい時代思想潮の唱導と研究とに多忙であつた長崎讀書界が現在どんな状態にあるかを見ることは強ち樂屋落ばかりの興味ではあるまいと思はれる今長崎圖書館の統計の現はす所によると恰かも文藝紙上から賀川豊彦氏、江原小彌太氏、櫻井祐男等の影が薄らきか、つたと同様に而も時期を同じくして長崎人の社會問題に關する研究熱が冷めか、つたやうにも思はれる。

一面から見る時には中央に於けるそれが今や研究の時期を去つて實行の時期に這入つたと同様長崎のそれも實行

期に這入つただと見る人のあるかも知れないがそれは直ちにそうとも云へぬ節々がある最近中央に於て此種圖書の出版が減少したことは勿論として長崎に於ける研究熱が急激に減退したことは統計の上に争へぬ事實である。最近閲覧者の上に特に注意すべきは文學語學が最多数を占めてゐることは今日も昨日も圖書界の恒例として従來は宗教哲學、歴史傳記が第二位三位を占めてゐたに拘らず大正十年より順に變じて其間に數學理學が常に第二位を占むるに到つた珍現象である。

今大正十年以降大正十三年に到る三ヶ年間の統計中文學語學の閲覧者数を基調として示せば左の如くである。

年	文學	數學	宗教	歴史	傳記
大正十年	四四、三二六	一四、三三五	一三、〇一〇	一一、七八〇	
大正十一年	同	同	同	同	一一、〇七三
大正十三年	同	同	同	同	八六一
合計	一三三、〇〇一	三三、〇〇〇	三九、〇〇〇	三三、〇〇〇	三三、〇〇〇
前年比較	増	増	増	増	増
前年比較	増	増	増	増	増
前年比較	増	増	増	増	増

この現象は單に數字が示すばかりでなく最も純心なる兒童讀物に就いて見るも顯著なるものがある同時にお伽童話其他の圖書に於ても主要材料の多くが理學に關したるもの、多くなつたことは特に注意すべきであると思ふ。又前記同様三ヶ年に亘る閲覧者の年報數を見るに

年	合計	前年比較
大正十年	二八五、九五七	増
大正十一年	三三二、八九八	増
大正十二年	三八五、八六四	増
大正十三年	四五〇、二〇三	増
合計	一、四一三、九一八	増
前年比較	増	
前年比較	増	
前年比較	増	

大正十四年十月十一月の二ヶ月間に最も多く讀まれたる圖書

- 宗 教 ○佛教概論 ○宗教と人生 ○日本西教史 ○宗教學概論
- 哲 學 ○宇宙と人生 ○印度哲學研究 ○大日本倫理思想發達史 ○日本倫理史 ○國民道德論 ○日本倫理 ○死と其神秘 ○哲學知識 ○哲學概論 ○今日の常識 ○現代思潮講演集
- 教 育 ○學校體操要義 ○教育の革命時代 ○最新各科教授資料及實際教授案 ○倫理と教育 ○教育學 ○クレヨン畫教授の理論及實際 ○教育的倫理學講義 ○話方教授の新主張と實際 ○胎内教育 ○教育衛生 ○受驗指針 ○校歌ローマンス ○算術教授案
- 文 學 ○フランス童話集 ○グリム童話集 ○綺堂戯曲集 ○江戸から東京へ ○關東七人男浪花七人男 ○坂本龍馬 ○天獄と地獄の間 ○軍事探偵 ○近藤勇 ○門 ○夜來の花 ○紅葉全集 ○不死の女王 ○幽芳全集 ○漱石全集 ○幡隨院長兵衛 ○ゲーテ全集 ○現代小説全集 ○大近松全集 ○近代劇十篇 ○潤一郎傑作集 ○罪と罪 ○元祿時代 ○希臘神話 ○イソップ物語 ○世界童話大系 ○現代思想文學 ○子規全集 ○由井正雪 ○半七捕物帳 ○逆境の勇士 ○エマーソン論文集 ○巖窟王 ○愛郷記 ○毒草 ○八幡船 ○彼岸過迄 ○萬葉古義 ○歐外全集 ○古塔の幻 ○富士 ○宮本武藏の後日の仇討 ○若き日のベスタロッツチ ○黄色の部屋 ○ある心の影
- 語 學 ○漢和大辭典 ○辭林 ○詳解漢和大辭典 ○國文解釋法 ○井上英和辭典 ○井上中辭典 ○井上

- 和英中辭典 ○武信和英辭典 ○英和活用辭典 ○漢文解譯法 ○英作文考へ方作方 ○英作文の着眼點 ○英文和譯法 ○和文英譯法 ○英文典 ○英語問題答案註解 ○生きた英文法 ○故事熟語大辭典
- 歴史 ○西洋歴史參考書 ○國史大系 ○西洋史講義 ○東洋史講義 ○支那文化史 ○西洋歴史講義 ○模範最新世界年表 ○明治功臣錄 ○長崎市郷土誌
- 傳記 ○職員錄 ○幕末三俊 ○高山彦九郎 ○腕一本から ○江戸俠客物語
- 地誌紀行 ○南船北馬 ○上海百話 ○日本より支那へ ○上海事情 ○アマゾン探検記 ○マンダウキル東洋旅行記 ○上海案内
- 政治法律 ○債權總論 ○債權各論 ○日本債權法總論 ○同上各論 ○日本行政法原論 ○日本刑法 ○日本刑法論 ○日本物權法 ○現代犯罪研究 ○犯罪科學の研究
- 經濟 ○經濟原論 ○國民經濟學 ○リカアートの經濟原論 ○人力と能力 ○貧乏物語 ○株式會社經濟論 ○國民經濟原論 ○アルサス人口論 ○財政學
- 社會 ○無産階級の世界年表 ○平和問題 ○社會と人生 ○社會學十講 ○日本風俗史 ○社會學智識
- 數學 ○代數の研究 ○代數學問通解 ○代數學學び方考へ方解き方 ○代數學問題正解 ○代數學難問題解義 ○平面幾何學問題通解
- 理學 ○物理學問題通解 ○物理學詳解講義 ○物理學講義 ○系統的物理學解 ○化學講義 ○動物分類

- 趣味の動物 ○天文概説
- 醫學 ○胃腹の新しい衛生 ○簡易強健術 ○記憶力増進法 ○生命の神秘論 ○最新運動生理學
- 工學工藝 ○常識電氣學 ○誰にも出来る電氣工學 ○電氣工學 ○電氣及磁器 ○電氣學精義 ○電氣工學通論
- 兵事 ○砲彈を潜りて ○肉彈 ○日米戰爭未來記 ○日米戰爭夢物語 ○戰爭論 ○我等の國防へ
- 産業 ○商業書信文範 ○商業書翰文 ○商業算術問題詳解 ○商業作文 ○商業文精義 ○現代の商業及商業
- 音樂美術 ○西洋音樂の聴き方 ○西洋音樂の知識 ○現代の西洋繪畫 ○泰西繪畫及彫刻 ○浮世風俗とやま
- と繪繪 ○近世繪畫史 ○浮世繪の諸派 ○スケッチ漫畫法 ○西洋美術史 ○スケッチの描き方

長崎縣立長崎圖書館閱覽狀況

大正十四年 自七月 至十二月 閱覽人員表 (取扱別)

種別	七月		八月		九月		十月		十一月		十二月		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
特別		四二五		七		二八〇		一八九		一四四		三四四	一、四六九
普通	六、四三	六六〇	四、一〇一	三、八八	五、一六〇	四、八〇	四、四三三	五、五九	四、四二二	四、四二二	六、一九八	五、二	三〇、四六六
携出	一〇、八五	一、〇三二	九、四五五	一、七九〇	一〇、一七〇	一、四〇四	七、九六六	一、二二二	六、四六〇	六、四六〇	九、四〇〇	六、二二	五〇、五九〇
計													六、三三七

新着和漢圖書目錄

自大正十四年四月
至大正十四年九月

閱一覽日冊平均數	計	九門	八門	七門
一、五〇、三	四、〇〇〇	三、一七九	一、六六九	一、〇七〇
一、四九、六	四、七三〇	一、四、九五九	一、二、七〇〇	八、九
一、八三、七	五、八八八	一、七、三三四	一、三、八三三	一、一、七三三
一、六五〇、六	三、九、七二六	三、一、〇〇〇	一、一、二三三	一、〇、八六六
一、六五、五	三、五八〇	九、一〇八	九、六	八、九二
一、六〇、六	四、四九九	三、二、九〇三	一、五、五七	一、〇、九四
一、六〇、一	一、五、四三三	七、六、六	七、九、〇〇	六、一、五

元

新着和漢圖書目錄

自大正十四年四月
至大正十四年九月

閱一覽日冊平均數	計	九	八	七
		門	門	門
一、五〇、三	四、〇〇〇	一、三、一七	一、六、六	一、〇、七
一、四、五、六	四、七、七〇	一、四、九、七	一、二、七〇	八、八
一、八、三、七	五、八、八	一、七、三、四	一、三、八、三	一、二、七、三
一、六、五、六	三、九、七、六	三、一、〇〇	一、一、三、三	一、〇、六、六
一、六、九、五	三、〇、五、八〇	九、二、〇、八	九、六	八、二
一、六、九、六	四、四、五、九	二、九、〇、二	一、五、七	一、〇、四
一、六、四、二	二、五、四、三	九、六、八	七、九、〇	六、一、五

元

目次

第一門	一〇〇宗教、哲學、教育.....	一九
第二門	二〇〇文學、語學.....	三三
第三門	三〇〇歷史地誌傳記紀行案內.....	三七
第四門	四〇〇政治法律經濟財政社會統計.....	三三
第五門	五〇〇數學、理學、醫學.....	三三
第六門	六〇〇工學、工藝、兵事.....	三三
第七門	七〇〇產業、商業、交通、通信.....	三三
第八門	八〇〇美術、家事、諸藝、遊技、武術.....	三三
第九門	九〇〇事彙、叢書、全集、隨筆、書目、雜書、新聞、雜誌.....	三三

新著和漢圖書目錄

自大正十四年四月
至 全 年九月

第一門、宗教、哲學、教育

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
淺きは深きなり	野々村眞太郎著	一	二〇	八七	求安錄	內杜鑑三著	一	二二	一〇五
意志の自由	戸坂潤譯	一	二五	九二	光明の生活 <small>(辨榮聖者遺稿要集)</small>	田中木又著	一	二二	四四九
精神逸話の泉	高島平三郎著	一	二四	三四	教育學十講	林博太郎著	一	二〇	三五二
英語試験問題通解 <small>大正十二年度高等馬場吉學校、專門學校、信著</small>	伊藤勇太郎著	一	三一	一四	教育學紀要第一卷	林博太郎著	一	二〇	三四八
易經乾坤	北原種忠著	二	二七	二〇	藝術の本質	土田杏村著	一	二〇	三四三
家憲正鑑	井上角三郎著	一	二三	一四	現代思潮大觀	金子馬治著	一	二〇	二三八
觀音とは何か	佐藤真一郎著	一	二三	四八	現代の趨勢に倫理的批判	同文館編輯部編	一	二〇	二二三
學習園の經營と其活用	佐藤真一郎著	一	二三	三六	藝術上の兒童畫教授	吉田靜致著	一	二三	八四
教育教授の實際的新主張	佐々木秀一著	一	二三	三七	現代の哲學	大竹拙三著	一	二三	三三一
教育生理學	岩原拓著	一	三〇	三四	現代哲學概論	高橋里美著	一	二〇	二二七
近代犯罪研究	小酒井光次著	一	二五	九三	現代哲學講話	金子筑水著	一	二〇	二三四
舊約書の文學	渡邊善太著	一	二三	一〇六	現代哲學辭典	村瀬哲人著	一	二〇	二二三
					高等小學國史解說	現代哲學研究會編	一	二〇	二二二
						增澤淑著	一	二三	三三五

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
公民教授要綱解説及資料	島山彌榮藏著	一	一三二	三三八	書經	上下	一	一三二	三三二
小學國史挿畫之研究	畑中題三著	一	一三三	三三六	詩經	天地	一	一三三	三三六
文檢受驗用國民道德要領	河野清丸著	一	一三三	三八三	人生論十二講		一	一三三	三八三
皇室中心主義	竹由三之助著	一	一三三	三九一	時間と自由意志		一	一三三	三九一
皇國運動	笈克彦著	一	一三三	三九九	口語淨土三部經		一	一三三	三九九
最善の信仰	本田日生著	一	一三三	四〇八	宗教への闘争		一	一三三	四〇八
職業指導と學校教育	櫻井香織著	一	一三三	四一四	詩學(希)アリストテレス	松浦嘉一譯	一	一三三	四一四
市民教育資料	長崎市勝山尋高小學校編	一	一三三	四三三	思想と人格		一	一三三	四三三
神道の現代的研究	橋本文壽著	一	一三三	四六七	人格の生活		一	一三三	四六七
宗教の發達	寺澤智了譯	一	一三三	四八九	人格の生活		一	一三三	四八九
新體育家の思想	小原正忠著	一	一三三	四九五	新心理學		一	一三三	四九五
劣等兒心理と其教育	青木誠四郎著	一	一三三	四九八	兒童保護		一	一三三	四九八
春秋	朱 蕪	一	一三七	二二二	新興藝術と新教育		一	一三七	二二二
新刻詩經集註		一	一三七	二二三	新潮と教材の運用		一	一三七	二二三

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
初等數學教育根本的考察	佐藤其一郎著	一	一三二	三三四	聖フランチェスコ	黒田正利著	一	一三二	三三四
新時代の學校教員	廣井家太著	一	一三二	三三八	聖書の常識	敬醒社編	一	一三二	三三八
文部省實業教員受驗指計	市川一耶著	一	一三二	三三二	世親の宗教	佐伯其謙著	一	一三二	三三二
西洋哲學史	廣瀬淡窓著	一	一三七	二四	生の實現としての佛教	高柳順次郎著	一	一三七	二四
西洋哲學史	米國ジャリス著	一	一三〇	二三五	體育上の病理と診断	田邊郁著	一	一三〇	二三五
西洋哲學史	北哈吉譯	一	一三〇	二三五	靈夫直柱	上下	一	一三〇	二三五
聖フランチェスコの傳	八卷顯男著	一	一三三	二〇七	大僧正天海	辻善之助著	一	一三三	二〇七
大正十三年度全國公立中學校經費ニ關スル調査		一	一三三	一四二	體驗主義の教育	早川國吉著	一	一三三	一四二
全國高等女學校ニ關スル調査	文部省普通學務局編	一	一三三	三三〇	大正十三年度全國私立中學校	文部省普通學務局編	一	一三三	三三〇
全國公私立中學校ニ關スル調査	文部省普通學務局著	一	一三三	三五二	ダルトン案の批判	廣瀬均著	一	一三三	三五二
全國特殊教育狀況	文部省編	一	一三三	三五〇	條件反射論	黒田源次著	一	一三三	三五〇
絶對運命の精神	大山幸太郎著	一	一三〇	二二〇	圖書藝術教育論	矢澤弦月著	一	一三〇	二二〇
西洋倫理學史	市川一耶著	一	一三三	八三	綴方教授に關する最近研究	帝國教育會編	一	一三三	八三
西洋文化史論十二講	朝日融漢著	一	一三〇	二二二	哲學概論大集成	三浦藤作著	一	一三〇	二二二

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
東京高等師範學校第一臨時教員養成所一覽	吉原藤川著	一	一三〇	三五九	佛敎序説	高神覺昇著	一	一三三	四七
系統的教育史	東京外國語學校編	一	一三一	一五	不亡録	望洋吟社著	一	一三三	四九
東京外國語學校	東北帝國大學編	一	一三二	九二	佛陀三聖訓	常盤大定著	一	一三三	四三
東北帝國大學一覽	長崎縣内務部編	一	一三〇	四五	フランソアの修身敎授	大和資雄譯	一	一三一	三三
大正十三年長崎縣教育要覽	名古屋高等工業學校編	一	一三二	一〇	佛敎史林	下川熊次郎著	一	一三〇	三五五
名古屋高等工業學校一覽	長崎醫科大學編	一	一三一	一四〇	東京文華中學講義	深浦正文著	二	一三三	四五〇
長崎醫科大學一覽	日本佛敎史論 上下	二	一三三	四七	佛敎聖典概論	小林喬里著	一	一三三	四五三
日本佛敎史論	鳥居龍藏著	一	一三〇	八八	佛陀の福音	廣田傳藏著	二	一三〇	三六〇
日本佛敎の原始宗敎	日本帝國第四十九年報 上下	二	一三〇	三	米國現代の教育	關東總内務局學務課編	一	一三〇	九二
日本帝國第四十九年報	小林照朗著	一	一三四	四五〇	南滿洲ノ神社ト宗敎	明治專門學校編	一	一三三	一四二
人間意識の發達	片岡重助著	一	一三二	三三九	明治專門學校一覽	明治專門學校編	一	一三三	一八
最新農業敎授大資料	高垣勲次郎譯	一	一三三	一〇八	禮記(一、二、三、四)	寛政己酉	四	一三七	二九
パウロ傳	三宅ヤス子著	一	一三〇	三四九	リツプス自然哲學	八倉萬壽治譯	一	一三〇	三五五
母の教育									

第二門 文學、語學

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
論理學通論	須藤新吉著	一	一二二	一六	イフイゲーニエ其他	内山貞三郎著	二	一二九	一〇九
吾國體と宗敎	龜谷聖馨著	一	一一〇	九〇	英文小話	山形五十雄譯	一	一三四	二二七
吾國體と基督敎	加藤弘之著	一	一一三	二二	繪本更科草紙	栗杖亭鬼卯著	一	一一一	二二八
					繪本金花談	石田玉山畫	一	一一一	二二八
					エルテルの悲み親和力	速水春曉著	一	一一一	二二八
阿片溺愛者	アケンシー著	一	一二五	九六四	英美文藝印象記	泰豐吉著	一	一二九	一〇九
愛府	泉鏡花著	一	一二五	九六二	英和大辭典	日高只一著	一	一二九	一一二
あらたま	齋藤茂吉著	一	一二二	二二九	阿蘭陀の花	井上十吉著	一	一三四	一七
淺間嶽面影草紙櫻姬全傳曙草紙	武者小路實篤著	一	一二五	九四五	恩讐の彼方に	永見徳太郎著	一	一二六	一六五
泉と鐘	山宮九著	一	一二四	二四〇	歌集憶ひ出の丘	菊池寛著	一	一二五	九五八
英米新詩選	松浦政泰譯	一	一二四	二二九	王女の行衛	秋元正四譯	一	一二四	二二六
英雄物語	中島清譯	二	二二九	二〇九	櫻谷集	黒田長成著	一	一二八	一九〇
井ルヘルム・マイステル	山東京傳著	一	一二二	二二八	鷗外全集第十七卷	森林太郎著	一	一二〇	六八
優曇華物語復讐奇談安積沼	北尾重政畫	一	一二二	二二八	熱語漢和大辭典	文明堂編輯部編	一	一二二	二五八

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
可憐の少女	松浦政泰譯	一	三四	二四二	現代戯曲全集 第十卷	長田秀雄著	一	二六	一六四
ガリバー旅行記	松浦政泰譯	一	三四	二四二	同上	松井松翁外四名著	一	二六	一六四
受驗漢文解釋の基礎	安藤藤四郎著	一	二八	一九一	現代文問題詳解 最近十三年間高等專門學校入學試驗學會編	小林榮子著	一	二二	二二六
漢文解釋虎の巻	安達大壽計著	一	二八	一八八	源氏物語活釋	小森榮子著	一	二二	二二五
概観英吉利文學史	大田鎮九一譯	二	二九	一一五	源義朝	田山花袋著	一	二五	九三四
彼女の運命 後編	菊池幽芳著	一	二五	九四七	國語解釋虎の巻 教科參考 受驗準備	安達大壽計著	一	二二	二二七
歌妓の秘密	福永洩譯	一	二五	九三五	古典劇大系 第一、七、十、十五卷		四	二六	一六二
歌集(大虚集)	島木赤彦著	一	二二	二二二	創作 近藤勇	村松梢風著	一	二五	九五七
歌集しがらみ	中林憲吉著	一	二二	二三四	講談資料 祝祭日及び國民記念日	相島龜三郎著	一	二四	九六
綺堂戯曲集(一、二、三、五、六、七卷)	岡本綺堂著	五	二六	一五三	全國校歌、寮歌、應援歌と其の解説	宮部治郎吉著	一	二二	二二六
泣菫詩集	瀧田泣菫著	一	二二	二四〇	豪膽少年 英文和譯 物語叢書	松浦政泰譯	一	二四	二二二
戯曲作法	小山内薫著	一	二六	一六八	新譯紅樓夢	大宰衛門著	一	二五	九三九
奇談夢之棧	勝峯金治著	一	二三	二二	黒潮	徳富健次郎著	一	二五	九四二
現代戯曲全集	中村吉藏著	一	二六	一六四	こんこん狐	植木考之助著	一	二四	二二七

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
校訂西鶴全集 上下	熊谷千代三郎著	二	二五	一七七	スミルノ博士の日記	ドゥノセ著	一	二五	九六三
三家庭	田中友一、小櫃貞治譯	一	二五	九六一	隨齋諸話	野田要吉著	一	二三	二一一
サフォ	齊藤太郎譯	一	二五	九五四	スタンダートと英大辭典	竹原常太郎著	一	二四	二二九
清水次郎長	矢田義勝著	一	二五	九四九	世界征服	宮崎一雨著	一	二五	九六五
秋存分、常盤の香 古俳書文庫第十篇		一	二三	二二	西湖物語	中華鮑會麗錄著	一	二五	九五五
支那文典	廣池千九郎著	一	二三	二七	世界童話大系	世界童話大系刊行會編	一	二〇	一〇一
諸國お伽競べ 英文和譯 物語叢書	松浦政泰譯	一	三四	二三八	同上	愛イエイツ著	一	同	同
詩集 ケーテ全集第一卷	獨ケイテ著	一	二九	一〇九	世界童話研究	蘆谷重常著	一	二〇	一〇七
子規全集 第八卷	正岡子規著	一	二〇	一〇五	創作の華	田麻比文雄著	一	二五	九四六
淨瑠璃名作集	義大夫同好會編	一	二六	一六六	響生兒の復讐	和氣律次郎著	一	二五	九三六
子規全集 第一卷 第七卷 第二卷 第十一卷	正岡子規著	四	二〇	一〇五	燈影	田山花袋著	一	二五	九四八
神典	伊ダンテ著	一	二六	一六一	タイース	望月百谷譯	一	二五	九三三
獸人	ロンドン原著	一	三四	二二六	大凡愚親鸞	松田青針著	一	二五	九三八
新英和大辭典	濱林生之助譯	一	三四	二二八	忠直卿行狀記	菊池寛著	一	二五	九五九

書名	著者名	冊数	類目	番號	書名	著者名	冊数	類目	番號
近松研究の序編	前島春三著	一	二六	一六九	日本歌謠史講話	坂井衡平著	一	二三	二四
千代蠶媛七變化物語	振鷺亭著	一	二二	二八	芭蕉翁真跡集	栗田二三著	一	二三	二八
忠臣水滸傳浮牡丹全傳	山東京傳著 北尾重政畫	一	三一	同	芭蕉門古人真跡集	栗田二三著	一	二三	二七
蠶魚	濱林生之助譯	一	三四	二六	評傳バイロン	木村鷹太郎著	一	二三	二七
地上の愛	三上於菟吉著	一	二五	九四三	ビスマルク演説集	後藤新平著	一	二四	九四
徒然草講話	沼波瓊音著	二	二二	二二	評註平賀元義歌集	尾山篤二郎著	一	二二	二四一
校通議	類 襄 著	二	二四	九五	詩風、光、木の葉	大木篤夫著	一	二二	二三五
天路歷程	パンヤン著 松東雪舟譯	一	二五	九五二	筆にまかせて	芳賀矢一著	一	二二	二二〇
東京正則高等女學講義	下川熊次郎著	一	三二	二五七	扶桑皇統記圖會	好華堂野亭著 柳齊重春畫	一	二二	二二八
唐陽山人詩集	上下 横川 鶴 著	一	二八	二八九	ペラミー(美貌の友)	大宰衛門著	一	二五	九四〇
獨和兵語辭書	藤山治一著 高田善次郎著	一	三五	二	兵學大講義	白井喬二著	一	二五	九五〇
捕物時代相	白井喬二著	一	二五	九四四	評論と隨筆	滿月會編	二	二〇	二二一
長柄長者黃鳥墳刀筆青砥石文	栗杖亭鬼卯著	一	二二	二八	平家物語圖繪	高井關山著 歸齊北馬畫	二	二二	二二八
日本趣味十種	國學院大學編	一	二二	二二	北條時頼記圖繪	池田東雄著 松川乎山畫	一	二二	二二八

書名	著者名	冊数	類目	番號	書名	著者名	冊数	類目	番號
報恩記	芥川龍之助著	一	二五	九六〇	吾等は如何に生くべきか	英ウイリアム、 モリス著 本間久雄譯	一	二〇	二二
星月夜顯晦録	高井關山著 歸齊北馬畫	一	二二	二八	吾輩は猿である	松浦政泰譯	一	二四	二二三
萬葉集新考	井上通泰著	二	二二	五	文學に現我が國民思想の研究	津田左右吉著	二	二〇	二二三
幻の園	ウエルソ作 濱林生之助譯	一	三四	二三四	平民文學の時代上 貴族文學の時代	武信由太郎著	一	三四	二二三
マーデンのハウ	靈感的英文 ツীগットの註解 和譯の研究 高橋良一著	一	三四	二三二	和英大辭典	われが生活より	一	二九	二〇九
宮本武藏	創作講談 村松梢風撰	一	二五	九五六	ゲーテ全集 第八卷	生田長江譯	一	二九	二〇九
本居宣長稿本全集	第一、二輯 本居清造著	二	二二	一八二	第三門 歴史、地誌、傳記、紀行				
創屋根裏の二處女	吉屋信子著	一	二五	九四二	亞細亞研究 第二號	大坂東洋學會編	二	三三	四七
矢車草	加藤武雄著	一	二五	九三七	維新士佐勤王史	瑞山會編	一	三六	二三〇
幽芳全集 第十三、十四、十五卷	菊池清著	三	二〇	一四四	一字庵菊舍尼遺稿	本庄能太郎著	一	三一	二三四
ユース・オヴ・ライフ講話	吉田清譯	一	三四	二三〇	奄美大島史	坂口總太郎著	一	三六	二二九
遊子江より野紀行	顯原退藏著	一	二三	二二	燕吳戴筆	那波利貞著	一	三五	二七四
謠曲辭典	峰谷時順著	一	二三	二六					
驢馬物語	英文和譯 物語叢書 山縣五十雄譯	一	三四	二三五					

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
歐米を縦横に	佐竹義文著	一	三五	一八〇	希臘羅馬神話(傳説ノ時代)	野上彌生子著	一	三九	二〇
歐米の旅より	守屋榮夫著	一	三五	一七八	近世日本國民史	錦宮猪一郎著	一	三四	三四
大島圭介傳	山崎有信著	一	三一	三六二	熊狩の旅	徳川義親著	一	三五	一七九
大倉鶴彦翁	鶴友會編	一	三一	三五九	歡樂の支那	後藤朝太郎著	一	三五	一七六
樺太廳治一斑	樺太廳編	一	三三	三五	關東廳要覽(大正十四年)	關東廳長官 官房文書課編	一	三三	四二
樺太廳治要覽 第四回	樺太廳編	一	三三	二六	觀樹將軍縱橫斷	能田宗次郎著	一	三三	二六
咸北雜俎	川口卯橋著	一	三七	二四	皇朝續文獻通考	沈家本外數名編光緒乙巳冬	六	三八	四八
ガンヂー論	福永渙譯	一	三三	二四	同上	嵯瑛外百十六人編光緒二十七年	五	三八	四八
欽定大清會典事例	崑岡外百九八名編光緒戊申一五〇	三	三八	八一	皇朝通典	嵯瑛外百十六人編光緒二十七年	三	三八	四三
欽定大清會典	崑岡外百九八名編光緒戊申	二〇	三八	八〇	皇朝通志	嵯瑛外百十六人編光緒二十七年	二	三八	四一
九朝東華錄	自卷八至 卷九欠本 王先謙敬著	二〇	三八	四九	皇朝掌故彙編	郵張壽鏞外四名編光緒壬寅	七	三八	三五
欽定續文獻通考	嵯瑛外百十七人編光緒二十七	四〇	三八	四七	康熙大帝	西木白川著	一	三八	七九
欽定續通典	嵯瑛外百十七人編光緒二十七	七八	三八	四四	航米記	第二、三篇 八代國治著	二	三五	一七五
欽定續通志	嵯瑛外百十七人編光緒二十七	六〇	三八	四二	國史大辭典(あゝを)	八代國治著	一	三一	一七四

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
皇太子殿下海外御巡遊日記	宮内大臣官 房庶務課編	一	三五	一七〇	諏訪史	居島龍藏著	一	三六	二三一
小松原英太郎君事畧	阪谷芳郎著	一	三一	三五八	世界産業地理要論	左海猪平著	一	三〇	三四
昨夢錄	平山成信著	一	三五	一七	參考世界地理講義	西田卯八著	一	三〇	三三
在長沙帝國領事館管轄 區域内事情	外務省通商局編	一	三四	九七	先哲叢談	原善公通著	一	三一	三六五
改造後の最新世界地理集	角田政治著	一	三〇	三三	小方壺齋輿地叢鈔	南濱河王光緒辛卯	一	三八	四五
箋注蒙求 中下		二	三三	七五	西洋歷史講義	朝日融溪著	一	三九	四八
佐世保發達史	北島榮助著	一	三六	二五	大日本古文書	東京帝國大學編	一	三六	一一
最新世界地理集成	角田政治著	一	三一	二二	東洋史	寺島圭三著	一	三八	三四
史學會論叢 第一輯	史學會編	一	三〇	三五	大日本帝國地理精義	小林房太郎著	一	三一	二六
十朝聖訓		一〇〇	三八	三九	大正十四年朝鮮要覽	朝鮮總督府編	一	三一	三三
人文地理學解説(重要問題)	工藤暢須著	一	三二	二七	中外通商始末記	藪道人編光緒乙未仲夏	六	三八	四〇
成吉思汗ハ源義經也	小谷部全一郎著	一	三三	二五	朝鮮史話	幣原垣著	一	三七	三三
職員錄	印刷局編	一	三一	二七	地理書解説	富士鶴二郎著	一	三〇	三二
四十七義士(上卷)	林新著	一	三六	二七	調査彙報 第十三、十四 第十五號	朝鮮總督府庶務 課編	三	三一	三二

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
塚原夢舟翁	塚原周造氏海軍關係五十年紀念祝賀會委員編	一	一三二	三三三	長崎現勢要覽	長崎市役所編	一	一三四	二四
鄭氏通志	鄭樵撰 光緒二十七年	一	一三八	三七	長崎縣勢要覽	長崎縣編	二	一三二	一〇
鐵道旅行案内	鐵道省編	一	一三六	六〇	日本誇、關東	地理文庫	一	一三二	二八
東洋讀史地圖	箭内互著	一	一三八	八三	日本外史	嘉永元年戊申 頼山陽著	一	一三一	一七三
東洋史精義	西村爲之助著	一	一三八	八二	日本外史講義	自卷ノ一至卷ノ四 興文社編	四	一三一	一七一
東洋歴史參考圖譜	自第一輯 東洋歴史參考圖 至第四輯 諸刊行會編	二	一三八	五〇	日本史講話	萩野由之著	一	一三一	一七〇
東華錄	同光緒十有三年秋	二	同	兎	二千五百年史	竹越典三郎著	一	一三一	一五一
東華續錄	王先謙	一	三三八	兎	日本外史辯妄	法貴發編	一	一三一	一七〇
杜氏通典	李翰撰 光緒二十七年	一	三八	三六	日本より支那へ	後藤朝太郎著	一	一三四	九四
徳川幕府上期 近世日本國氏史	徳富猪一郎著	一	一三四	三四	日支鮮人百年の長計たるべき滿蒙發開策	石井福次著	一	一三三	四九
長崎	原郊月著	一	一三六	九九	日本地圖帖	小川琢治著	一	一三一	二六
南船北馬	森永太一郎著	一	一三五	一八二	馬氏文獻通考	馬端臨撰 光緒二十七年	一	一三八	三六
長崎市職員錄	長崎市役所編	一	一三一	三六六	美名錄 卷一	弘化巳	一	一三六	三六
ナポレオン時代史	筑作元八著	一	一三九	四九	平原	平野博三著	一	一三五	一七一

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
米國通信	秋永壽一著	一	一三五	一七二	歐洲の現勢と其の將來	永富守之助著	一	一四〇	一三二
本朝官職備考	三宅帶刀著	一	一三一	一七三	吾人の開拓すべき海外有望の富源	山田佐太郎著	二	一四五	一八
マダラナ・ソノイアバラ傳	聖女心學院編	一	一三三	七二	金は金を生む	吉川長之助著	一	一四四	三九
滿鮮の行樂	田山録彌著	一	一三五	一六九	階級問題 現代社會問題研究 第二卷	日本社會學院調查部編	一	一四五	六七
前橋市案内	前橋市役所編	一	一三六	九八	海外各地在留本邦人職業別人口表	外務省通商局編	一	一四二	一〇
南滿洲鐵道旅行案内	南滿洲鐵道株式會社編	一	一三六	九六	海商法	松本丞治著	一	一四三	六〇
明治文化發祥記念誌	大日本文明協會編	一	一三五	一四	簡易保險局統計年報	簡易保險局編	一	一四七	二九
山縣元帥	杉山茂丸著	一	一三一	三六一	關東地方震災救援誌	大阪府編	一	一四三	三三
由利公正傳	三岡丈夫著	一	一三一	三六〇	官報 自大正十四年三月一日 至大正十四年三月三十一日	内閣印刷局編	一	一四〇	五〇
橫濱古圖錦繪展覽	橫濱市圖書館編	一	一三六	二二八	机上辯護士	中澤陽堂編	一	一四〇	一八六
蘭領東印度事情	外務省通商局編	一	一三四	九六	金融六十年史	東洋經濟新報社編	一	一四〇	一六三

第四門 政治、法律、經濟及 財政、社會統計

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
英國殖民發展史	永井柳太郎譯 英、エナ、エナ、アント著	一	一四二	一五	勤儉獎勵に關する計畫要綱	長崎縣編	一	一四四	三
					貨幣論	經濟學說大系七 安倍浩著	一	一四〇	一六

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
外務省公表集 第五輯	外務省編	一	四三	八六	債權各論	橫田秀雄著	一	四二	一一
KKK	杉本義郎譯	一	四五〇	一九五	日本親族法要論	柳川勝三著	一	四二	七五
憲法撮要	美濃部達吉著	一	四二	三三	第一回上海經濟年鑑	上海每日新聞社編	一	四七	四八
經濟的新教師論	立山藤松著	一	四五	四二	執務能率講話	神長倉眞民著	一	四五	四〇
現代社會問題研究 日本社會學院調查部編	日本社會學院調查部編	一	四五二	六七	常平倉の研究 經濟史研究叢書第一冊	木庄榮次郎著	一	四三〇	一六七
現代社會文明 題第一卷	建部遜吾著	一	四五二	六七	商行爲法論	水口吉藏著	一	四三	四一
研究館彙報五卷五號六卷一號	高商編	二	四三〇	一九	新策 二、三、四、	賴 襄 著	一	四〇	一三三
刑事訴訟法	牧野英一著	一	四四	三	支那古代經濟思想及制度	田崎仁義著	一	四三〇	一三五
經濟思想及制度	田崎仁義著	一	四三〇	一六一	殖民地便覽	内閣殖拓局編	一	四三	三七
經濟科學十二講	赤松克麿著	一	四三〇	一六一	社會學	景山智雄著	一	四五〇	一九六
國策私見 前篇後篇合卷	足立陽太郎著	一	四五二	一七	純正社會學	石川功譯	一	四五〇	一九九
是れでも世界平和か	石丸藤太著	一	四二	一〇五	社會政策論	高島素之安 倍浩譯	一	四五二	一四
債權法概論	岩田新著	一	四二	七六	世界革命之裏面	包荒子著	一	四五〇	二〇一
債權總論	橫田秀雄著	一	四二	五五	世界經濟史概論	川西正鑑著	一	四三〇	一六八

三

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
絶交問題	荒牧藤三著	一	四三	八七	電車ストライキ	桑田次郎著	一	四五二	一〇六
成功せる農村振興策	折目六右衛門著	一	四二	一〇九	大正十一年朝鮮總督府施政年報	朝鮮總督府編	一	四二	一〇八
註解訴訟記録 第一審手續	齋藤常三郎著	一	四四	二二	田園の文化	淺井榮次郎著	一	四二	一〇七
綜合經濟論	佐野學譯	一	四五〇	一五五	鐵道省鐵道統計資料	鐵道省編	一	四七	四一
租稅論	安部浩著	一	四四	二〇	都市計畫と公園	上原敬二著	一	四三	一〇六
臺灣蕃族習慣研究 臺灣總督府調查會編	臺灣總督府調查會編	八	四六〇	一九	特別民事訴訟論	松岡美正著	一	四四	二三
第六回國際勞動總會報告書 外務省編	外務省編	一	四三	七六	長崎市産業統計	長崎市役所編	一	四七	四九
第五十回帝國議會貴族院議事速記録	内閣印刷局編	一	四二	五〇	大正十三年長崎縣米麥統計	長崎縣編	一	四七	四六
第五十回帝國會議衆議院議事速記録	内閣印刷局編	一	四二	五〇	大正十二年長崎縣水産統計	長崎縣内務地方課編	一	四七	三七
大日本帝國港灣統計	内務省土木局編	一	四七	三〇	大正十一年長崎縣統計書 自第一篇至第四篇	長崎縣編	一	四七	二
中世寺院法と經濟思想	山口正太郎著	一	四三〇	一六九	長崎市社會事業要覽	長崎市役所社會課編	一	四五	一六
人口論	高島素之安 倍浩譯	一	四五	一四	長崎縣公報	長崎縣編	一	四二	五〇
貯金の出来る安心生活	天笠公平著	一	四三	四二	日本帝國統計年鑑	内閣統計局編	一	四七	一六二
土に還る	室伏高信著	一	四五〇	一九七	増訂日本債權法各論	鳩山秀夫著	一	四二	一七四

三

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
考古圖集 第三十二、三十三、三十四集	八木柴三郎著	一	五六	三	人生動物學	中澤毅一著	一	五七	七
考古圖集 自第二期一集至第七集	椎名其二著	一	五八	三	人類物語	神近市子譯	一	五八	二四
考古精説 第八集	丘淺次郎著	一	五九	三	人類及地球の運命	石井重美著	一	五九	二七
昆虫記	林鶴太郎著	一	五〇	四	診療寶典	山田豊著	一	五三	三
最新遺傳論	山田豊著	一	五〇	五	食物化學	澤村眞著	一	五七	一七
數學叢書 第十一編 算術四則問題	松平松年著	一	五七	五	生物地學講話	横山又次郎著	一	五七	六
最新の治療智識	小泉丹譯	一	五七	六	世界の反響	横山又次郎著	一	五〇	八
進化と思想	石原初太郎著	一	五七	七	科學世界の驚異	松平道夫著	一	五〇	八
進化學説 佛、ドワイツ、ユゴ、ノルド、スミス著	宮崎市八著	一	五〇	七	初等幾何學 第一卷	小倉金之助譯	一	五三	二
自然地理學概論	佐野榮治著	一	五二	八	小學算術の解き方 覺方管筆人著	古川龍城著	一	五三	四
社會學的認識論	伊藤準著	一	五五	八	星座の圖	森田松榮譯	一	五七	七
新力學	南光社編	一	五二	二	遺傳生命の科學	南光社編	二	五二	六
趣味の動物界	永野末治著	一	五二	三	代數模擬試驗	岡田剛著	一	五二	五
植物名鑑 (圖解)	東京博物學研究會編	一	五六	七	最新式代數學問題集	岡田剛著	一	五二	五

美

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
全國諸官立學校 代數模擬試驗	南光社編	一	五二	二	受驗物理學要點の研究	東辰藏著	一	五二	四九
代數の研究 上卷	永野末治著	一	五二	三	文明起源物語	相馬由也譯	一	五八	二五
大正震災美績	東京府編	一	五四	四	文化人類學	西村貞次著	一	五八	二六
最新地文地理集成	高橋純一著	一	五四	七	本邦氣候表	中央氣象臺編	一	五四	四
地理學通論 地文學の部	三村信男著	一	五〇	二	水を飲むべし	大阪毎日新聞サンデー毎日編	一	五七	二九
通論考古學	濱田耕作著	一	五八	二	毛詩品物圖改	岡公翼著	一	五〇	六
動物の分類と實驗 現代動物叢書第一卷	島山久重著	二	五五	九	兩性問題と生物學	木村德藏著	一	五七	七
東京府大震災誌	東京府編	一	五四	四	理化年表	東京天文臺編	一	五〇	八一
統計年報 自大正十一年一月至大正十二年十一月	第一區府縣立、金生病院編	一	五〇	四	體験に立理化新實驗法精説	長澤米次郎著	一	五〇	八七
日本考古學	中澤澄男著	一	五八	三	有史以前の跡を尋ねて	烏井龍藏著	一	五八	二六
燃料、試驗法及石炭購買法	若林金五郎著	一	五三	四	第六門 工學、工藝、兵事				
ピタミン	藤卷良知著	一	五七	一					
地球革命の語 水河時代	マツケイ、藤田一枝譯	一	五八	三					
近物理學受驗の研究	竹内潔著	一	五二	五					
大阪工業試驗所報告	大阪工業試驗所編	一	六〇	五	大阪工業試驗所報告	大阪工業試驗所編	一	六〇	五
大阪工業試驗所編	大阪工業試驗所編	一	六〇	五	大阪工業試驗所編	大阪工業試驗所編	一	六〇	五

五

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
日本労働運動發達史	赤松克麿著	一	四五〇	二〇一	普選案と歐米の近代道德	江木衷著	一	四二一	三一
日本法制史	池邊義象著	一	四四〇	五二	平和問題	建部遜吾著	一	四五二	一〇七
日本資本主義經濟の研究	高橋龜吉著	一	四三〇	一六六	同	山内雄太郎著	一	四五〇	二〇〇
農村法律問題	末松嚴太郎著	一	四二〇	一八五	保險法	松本丞治著	一	四三三	四二
能率増進通俗圖解	能率増進人の成功 近藤留藏著	一	四五四	三六	法制講話	森莊三郎著	一	四四〇	一八七
農村問題	現代社會問題 日本社會學院調查部編	一	四五二	六七	マルサス人口理論	佐久間原著	一	四五〇	二〇一
日本農民騒動史	木村靖二著	一	四五〇	二〇〇	民事訴訟法論	早川彌三郎著	一	四四四	二二
蕃族慣習調査報告書	自第二卷 臨時臺灣舊慣調査會編	四	四六〇	一九	無産階級の世界史	社會問題叢書 第四篇 上田茂樹著	一	四五〇	二〇三
貧窮	現代社會問題 研究第二卷 杵澤義房	一	四五二	六七	模範手形法講話	平尾廉平著	一	四三三	四〇
文藝年鑑	日本年鑑協會編	一	四七〇	八	改訂旅費法規の研究	濱垣恒著	一	四三七	一五
文化生活	科學を基礎とした枝元長夫著	一	四五四	四二	露國共產黨第十二回大會決議	(勞農露國調査資料第三十五篇) 南滿洲鐵道株式會社編	一	四五〇	一八〇
増補物權法	横田秀夫著	一	四二二	五六	露國工業的經濟に關する指導的意見	(勞農露國調査資料第二十五篇) 南滿洲鐵道株式會社庶務部調査課編	一	四五〇	一八〇
婦人運動	原田實著	一	四四二	一〇五					
普選と労働階級	江木衷著	一	四二一	三三					

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
勞農露國の言論機關	上卷 勞農露國調査會編 下卷 資料廿九篇卅篇 南滿洲鐵道株式會社編	一	四五〇	一八〇	氣象要覽	中央氣象臺編	一	一五四	二三
露國の工場委員會	勞農露國調査會編 資料第二十八篇 株式會社編	一	四四〇	一八〇	幾何學の根柢	中島秀次郎著	一	一五三	二三
労働と法總論	孫田秀春著	一	四二七	一四	幾何學、解き方詳解	清水清著	一	一五二	二三
勞農國家と教會	南滿洲鐵道株式會社編	一	四五〇	一八〇	近代科學二十三講	大沼十太郎著	一	一五〇	八〇
唯物史觀の改造	高島素之譯	一	四五〇	一九八	氣象雜纂	中央氣象臺編	一	一五四	四六
露國の各聯盟共和國概要	南滿洲鐵道株式會社編	一	四五〇	一八〇	理論化學解釋法	林輝著	一	一五三	四五
露國の自治共和國及自治論	同右編	一	同	同	受考化學要點の研究	東辰藏著	一	一五三	四四
露國工業法概要	同右編	一	同	同	化學の講義と問題の正しき解き方	藤木源吉著	一	一五三	四二
第五門 數學、理學、醫學					結核征服	茂野吉之助著	一	一五七	四〇
榮養研究彙報	榮養研究所編	一	一五七	二二	系統式化學解	山下祥輔著	一	一五三	四三
家庭生物學	小内繁雄著	一	一五七	七二	同	同	一	一五二	五〇
紀州魚譜	宇井維藏著	一	一五五	五〇	教育生理學	岩原拓著	一	一五二	一六
					子供を強くする爲めに	三田谷啓著	一	一五七	四一

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
考古圖集 第三十二、三十三、三十四集	八木英三郎著	一	五八	三	人生動物學	中澤毅一著	一	五七	七
考古圖集 自第二期一集至第七集	椎名其二著	一	五八	三	人類物語	神近市子譯	一	五八	二四
考古精説 第八集	丘淺次郎著	一	五八	三	人類及地球の運命	石井重美著	一	五八	二七
昆虫記	林鶴太郎著	一	五五	四七	診療寶典	山田豊著	一	五三	三
最新遺傳論	山田豊著	一	五二	一六	食物化學	澤村眞著	一	五七	二七
數學叢書 第十一編 算術四則問題	松平松年著	一	五〇	五九	生物地學講話	横山又次郎著	一	五七	七六
最新の治療智識	石原初太郎著	一	五七	四〇	世界の反響	横山又次郎著	一	五〇	八八
進化と思想	小泉丹譯	一	五七	七五	科學世界の驚異	松平道夫著	一	五〇	八五
進化學説 佛、ドラージュ、ノールド、スミス著	石原初太郎著	一	五〇	七四	初等幾何學 第一卷	小倉金之助譯	一	五三	二二
自然地理學概論	宮崎市八著	一	五〇	八二	小學算術の解き方覺方	菅隼人著	一	五一	四六
社會學的認識論	佐野榮治著	一	五二	八三	星座の圖	古川龍城著	一	五三	五四
新力學	伊藤準著	一	五五	四六	遺傳生命の科學	森田松榮譯	一	五七	七〇
趣味の動物界	東京博物館研究會編	一	五六	四七	代數模擬試驗	南光社編	二	五三	二六
植物名鑑 (圖解)		一	五六	四七	最新式代數學問題集	岡田剛著	一	五三	二五

吳

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
全國語言 代數模擬試驗	南光社編	一	五二	二六	受驗物理學要點の研究	東辰藏著	一	五一	四九
代數の研究 上卷	永野末治著	一	五三	二三	文明起源物語	相馬由也譯	一	五八	二五
大正震災美績	東京府編	一	五四	四五	文化人類學	西村貞次著	一	五八	二六
最新地文地理集成	高橋純一著	一	五四	四七	本邦氣候表	中央氣象臺編	一	五四	四四
地理學通論 地文學の部	三村信男著	一	五〇	二四	水を飲むべし	大阪毎日新聞サンデー毎日編	一	五七	三九
通論考古學	濱田耕作者	一	五六	二九	毛詩品物圖改	岡公翼著	一	五〇	八六
動物の分類と實驗 現代動物叢書第一卷	高山久重著	二	五五	四九	兩性問題と生物學	木村鶴藏著	一	五七	七三
東京府大震災誌	東京府編	一	五四	四八	理化年表	東京天文臺編	一	五〇	八一
統計年報 自大正十一年一月至大正十二年十一月	第一區府縣立、金生病院編	一	五〇	四	體験に立理化新實驗法精説	長澤米次郎著	一	五〇	八七
日本考古學	中澤澄男著	一	五八	三三	有史以前の跡を尋ねて	烏井龍藏著	一	五八	二八
燃料、試驗法及石炭購買法	若林金五郎著	一	五三	四三	第六門 工學、工藝、兵事				
ビタミン	藤卷長知著	一	五七	一三八	書名	著者名	冊數	類目	番號
地球革命の物語 水河時代	マツケイ、著 藤田一枝譯	一	五六	三〇	大阪工業試驗所報告	大阪工業試驗所編	一	六〇	五
近物理學受驗の研究	竹内源著	一	五二	五二	大阪工業試驗所編	大阪工業試驗所編	一	六〇	五

毛

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
海上の勝利	米ダフルユーエスシムス著 石丸藤太郎譯	一	六三	二六	電氣學精義	關口定伸著	一	六四	五四
紙漉重寶記	堀越壽助著	一	六三	七	獨佛戰史	千八百七十年 千八百七十一年 附圖共參謀本部編	二	六三〇	二〇〇
學界時報 第二卷	電氣學界編	一	六四	五	最新塗裝工業並塗料製造法	藤崎喜代太著	一	六三	七九
現代小學校の建築と設備	峰彌太郎著	一	六二	四	土木試驗所彙報	內務省土木試驗所編	一	六一	二
建築衛生工學	大澤一郎著 櫻井省吾著	一	六二	四	東京工業試驗所報告	東京工業試驗所編	一	六〇	一
航用測器學	井關貢著	一	六六	五	陶磁器試驗所報告	陶磁器試驗所編	一	六三	七五
航用測器學附圖	井關貢著	一	同	同	日露戰史	自第一卷至第十卷各付圖付	一	六〇	六九
最新鑛業智識	齋藤太吉著	一	六五	五	日本陶瓷史	今泉雄次著	一	六〇	一六
照明工學 (改訂)	建築書院編	一	六四	五	日本古建築菁華	岩井武俊著	一	六三	三八
耐震耐火家屋構造	大竹巽著	一	六二	四〇	ばんざい	中上豐吉著	一	六四	七〇
築港	廣井勇著	一	六一	二〇	放送無線電話	中川昌雄著	一	六四	六九
電子及原子論大要	水野敏之丞著	一	六四	七二	無線電話の話 (實用)	柳町政之助著	一	六二	三九
電氣機械試驗法	小澤省吾著	一	六四	六	露土戰史(附圖共)	千八百七十七年 千八百七十八年 參謀本部編	六	六〇	二二
ディーゼル、エンジン	淺川權八著	一	六三	四八	我が家の暖房		一	六二	三九

第七門 産業、商業、交通及通信

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
新しい草花の作り方	堀切參郎著	一	七二	二	商學通論	武田英一著	一	七〇	九
一萬圓儲ける迄	實業の日本社編	一	七〇	一三	商用文精義 (最新)	服部嘉香著	一	七五	七
温室園藝の智識	石井勇義著	一	七〇	二	趣味の郵便切手	三井高陽著	一	七一	三
アラ家畜の歴史	佛、アンリイフアラ 安成二郎著	一	七二	四	自由貿易及保護關稅論	高島素之 安部浩譯	一	七三	四
港灣と鐵道との關係調査	鐵道省運輸局編	一	七一	三六	實驗果樹剪定法	恩田鐵彌著	二	七二	五七
外國爲替相場の見方	野田澤軍治著	一	七五	一七	水産學綱要	杉浦保吉著	一	七一	三
必ず評判をこる新しい商店の經營と顧客の待遇法と販賣術	清水正巳著	一	七五	三三	世界の自由港制度	野波靜雄著	一	七二	一五
廣告文化	黒崎雅雄著	一	七五	二〇	全國文具界大觀 (大正十三年度)	坂本胖著	一	七五	二五
小鳥の飼ひ方	佐伯大太郎著	一	七三	二九	商業算術問題詳解	寶文館編輯部編	一	七五	六
國家の急務たる小運送の改善について	中野金次郎著	一	七三	一五	商業と經濟	長崎高商研究館編	一	七〇	一〇
最近の歐米商業會議所	商業會議所聯合會編	一	七五	三〇	臺灣貿易要覽	大正十一年度 臺灣總督府稅關編	一	七五	四五
最近簿記問題詳解	寶文館編輯部編	一	七四	二	茶業試驗報告	農商務省茶業試驗場編	一	七三	六
支那の金塊投機と銀相場	井村薰雄著	一	七三	一八	畜産事例	農業經營ヲ有利 ナラシメタル	一	七〇	九〇
					重要商品學講義	水口音三郎著	一	七六	二四

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
大正十一年度通信統計要覽	逓信省通信局編	一	七二	二	農業經濟學	橫井時敬著	一	七四	二九
大正十一年度鐵道輸送主要貨物數量	鐵道省運輸局編	一	七三	二七	趣味の飼ひ方	武知彦榮著	一	七四	三
朝鮮人の商業	朝鮮總督府編	一	七五	二四	應用肥料配合法	鈴木千代吉著	一	七二	六〇
大正十一年度鐵道統計資料	鐵道省編	一	七三	二〇	最新肥料學講義	鈴木千代吉著	一	七二	一
大正十一年度鐵道省年報	鐵道省編	一	七二	二六	肥料的麥作改良法	鈴木千代吉著	一	七二	一
大正十四年三月土地利用及開墾事業要覽(第六次)	農商務局編	一	七二	二八	メートル法	初等教育研究會編	二	七五	一九
名古屋市觀業要覽(第九回)名古屋市役所編	名古屋市役所編	一	七〇	四八	木炭ニ關スル經濟調査	鐵道省運輸局編	一	七四	二九
日本製品圖說	高銳一著	三	七〇	五〇	林業試驗彙報十六號	農商務省林業試驗場編	一	七四	七
府爲發信用狀論	伊東和雄著	一	七五	一三	最新林業の經營	上原敬二著	一	七三	一
日本綿布の世界的地位	山本順彌太著	一	七五	四三	米國ニ於ケル荷物ノ近距離運送	鐵道省運輸局編	一	七三	一六
日本全國鐵道線路圖	鐵道省編	一	七六	四	第八門 美術、家事、諸藝及遊技、武術				
日本全國鐵道線路哩程	鐵道省編	一	七六	三五	雲烟略傳 (藝苑叢書)	相見繁一著	一	八一	二三
農商務省第十一回工藝展覽會圖錄	農商務省編	一	七〇	四九	口嗜小史 (藝苑叢書)	春耕者峻巖著	一	八一	二三
					後素談叢 (藝苑叢書)	前田香雪著	四	八一	二三

書名	著者名	冊數	類目	番號	書名	著者名	冊數	類目	番號
繪葉書帖		二	八四	七二	今古紋樣集	藤井以正著	一	八五	三三
繪葉書		八	八四	七〇	裁縫おさいくもの上	伊藤學外二名著	一	八三	三四
江戸諸家人名錄 (藝苑叢書)	扇面亭著	二	八〇	二三	品川灣の投網	桐島像一著	一	八六	一九
音樂の世界は廻る	レオポルト、アウエル著 馬場二郎譯	一	八二	三四	小菰書譜	野口親筆著	一	八一	一五三
オリズムピアの印象	野口源三郎著	一	八〇	一四	十二刀法詳說 (藝苑叢書)	榎山二郎公忠著	一	八〇	二三
歐舞伎興業略年表	日比谷圖書館編	一	八三	二六	松陰快談 (藝苑叢書)	長野豐山著	一	八〇	二三
歌劇大觀	大田黒元雄著	一	八三	二七	新裁縫學習法	木下竹治著	一	八三	三三
寒築環綴上中下 (藝苑叢書)	淺野長祚著	三	八〇	二三	スケッチ漫畫自在	服部亮英著	一	八一	一五八
學翼 (藝苑叢書)	大江實衛著	一	八〇	二三	睡菴清秘錄	浦上春琴錄	一	八〇	二三
畫乘要畧 (藝苑叢書)	圓山應舉校著	一	八〇	二三	水彩畫の新學習	橫井曹著	一	八一	一四九
歌舞伎と近代劇概論	伊東鶴松著	一	八三	二六	西洋音樂のきゝ方	小松耕輔著	一	八一	三三
現代の日本畫	松本亦太郎著	一	八一	一五二					
現代の西洋繪畫	岡島狂花著	一	八一	二					
毛糸編物圖解	久保田義雄著	一	八三	三三					

書名	著者名	冊数	類目	番號	書名	著者名	冊数	類目	番號
小薊書譜	野口親筆	四	八二	一五二	ペン習字の意義及び練習法教授法	黒柳勲著	一	八二	四〇
石亭書談 (藝苑叢書)	石亭竹本興著	一	八二〇	二二三	ベイトヴエンの第九	田村實貞著	一	八三	三二
西洋美術史	佛、サロモン、フイナック著	一	八二〇	二二〇	ジュンフオニ	西村兼文著	一	八〇	二二三
たまつき術	小和田嘉一著	一	八三六	四	本朝畫人傳補遺	神原泰著	一	八〇	二二二
代表作集成 佛國及支那美術展覽	小崎都也野著	一	八二一	一五〇	未來派研究	ロマン、ローラ著	一	八〇	二二二
テニス(日本體育叢書第十四編)	太田芳郎著	一	八三〇	一五	ミケルアンジェロ及ミレ	木村莊八譯	一	八〇	二一九
手縫で出来る子供洋服	三須裕著	一	八三三	三五	明治以前洋書類集	後藤博山著	一	八二	一五三
浪華人物誌 (藝苑叢書)	阿本撫山著	一	八二〇	二二三	遊戲競技の實際	可兒鐘著	一	八六	三
日本美術年契	福地復一著	一	八二〇	二二三	洋樂夜話	大田黒元雄著	一	八三	三三
ニール河の草	木村莊八著	一	八二〇	二一七	良山堂茶話 (藝苑叢書)	阿部良山著	一	八〇	二二三
日本音楽の聴き方	那智俊宣著	一	八三〇	二二三	第九門 事象、叢書、隨筆、書目、雜書新聞、雜誌				
版畫禮讚	山田清作著	一	八四	六九	大増補 新しい言葉の字引	服部嘉香著	一	九〇	三〇
美術年鑑	美術年鑑編輯所編	一	八二〇	二一八	改訂版 新しい言葉の字引	植原路耶著	一	九〇	三〇
扶桑名公書譜 (藝苑叢書)	淺井不磨著	一	八二〇	二二三	新しい發明及發見	赤澤義人著	一	九五	五〇

書名	著者名	冊数	類目	番號	書名	著者名	冊数	類目	番號
一官吏の生活から	戸水昇著	一	九三〇	四七	聚團心理	英ウイリヤム、マクドナル著	一	九二〇	三元
柯公全集	大庭景秋著	二	九二〇	四九	失業經濟	大日本文明協會編	一	九二〇	四
近代科學の諸問題	大日本文明協會著	一	九二〇	三元	實用家庭科學	山本正三著	一	九二〇	三二
歡喜	後藤靜香著	一	九五〇	五三	新思想の解剖 上下	高木八太郎著	一	九二〇	二元
熊本縣立圖書館和漢分類目録	熊本縣立圖書館編	一	九四〇	八二	史學雜誌		一	九七〇	一六
教育と御伽の參考古書目録	青木平七著	一	九四〇	八二	週刊朝日 自大正十二年七月至大正十三年七月	大阪朝日新聞社	一	九六〇	二三
京都圖書館和漢圖書分類目録	(文學語學之部)	一	九四〇	四	生命の舞踏	岡部龜次郎譯	一	九二〇	四
同上 (社會産業之部)		一	九四〇	四	政局は斯くして動く	大日本文明協會編	一	九二〇	三元
古今要覽稿	圖書刊行會編	一	九二〇	九	その日その日の物語	加藤末吉著	一	九五〇	五
今日の常識	中下岳著	一	九二〇	二八	煙草禮讚	下田將美著	一	九三〇	四
郷土志料目録	鹿兒島縣立圖書館編	一	九四〇	七五	教育智識の庫	藤本敏郎著	一	九五〇	五
子供の疑問はどうか	近藤新一著	一	九五〇	五二	千葉縣立圖書館和漢圖書分類目録		一	九二〇	四
國際事情	外務省情報部	一	九七〇	二四	地球と太陽	イ、ハンケイン、ト著	一	九二〇	四
使命と人生	後藤靜香著	一	九五〇	五二	東京市立圖書館增加圖書目録		二	九四〇	五

書名	著者名	冊数	類目	番號
東亞同文書院圖書目錄	第一、二輯 東亞同文書院編	二	四〇	七三
日米國際紀要	大日本文明協會編	一	九二〇	三九
廣島高等師範學校和漢書分類目錄		一	九四〇	八三
比例代表制度論	大日本文明協會編	一	九二〇	四
彌動出世以前	近重眞澄著	一	九五〇	五四
明治文化の紀念と其批判	大日本文明協會編	一	九七〇	二三
吾が日吾が夢	イ、カーペンタ 著 宮島新三郎譯	一	九二〇	四

四

大正十五年二月

長崎縣圖書館協會會報

第一號

長崎縣圖書館協會

書名	著者名	冊數	類目	番號
東亞同文書院圖書目錄	第一、二輯 東亞同文書院編	二	九四〇	七三
日米國際紀要	大日本文明協會編	一	九二〇	三九
廣島高等師範學校和漢書分類目錄		一	九四〇	八三
比例代表制度論	大日本文明協會編	一	九二〇	四
彌動出世以前	近重眞澄著	一	九五〇	五四
明治文化の紀念と其批判	大日本文明協會編	一	九七〇	二三
吾が日吾が夢	イ、カーペンタ _一 著 宮島新三郎譯	一	九二〇	四

四

大正十五年二月

長崎縣圖書館協會會報

第一號

長崎縣圖書館協會

目次

一、報告	一
二、本會趣意書	一
三、本會規約	三
四、本會顧問	四
五、本會役員	四
六、長崎縣内圖書館狀況	六
七、耶蘇會年報を通して見たる長崎の開港、(本會講演筆記)	二

報 告

本會は大正十三年四月の創立に係り、全年十一月以來殆ど毎月長崎圖書館内に於て學術講演會を開催し來りたるが、大正十四年十一月會の規約を改正し、學術講演會の開催は隔月一回とし、時々會報を發刊することに定めたり然れども會員數尙ほ少きが爲めに獨立の機關雜誌を發刊するの餘力なし。故に當分の間は長崎縣立長崎圖書館の承諾を得て、全館の館報を増刷し、其の附録として本會の會報を加へ會員各位へ配本することとせり、會員各位幸に之を諒せられよ。

本會趣意書

學校は智識の所在と之を獲得する方法及び技能を授くる所にして知識其物を授くる所にあらず。知識其物の獲得は之を卒業後の自習自學に待たざるへからず。

往時義務教育制度の行はれざりし時代に於ては學校教育を受くるものは多くは向上の精神あるものなりき。故に學校卒業後の自習自學も亦或程度までは自然に行はれたり。是れ寺小屋式の不完全なる教育法にもその効果を收めたる所以なり。

義務教育制度實施の今日に於ては、小學教育を受くるもの、大多數は強要せらるゝが爲めに已むを得ずして就學

するものなるが故に、卒業後自習自學は外部より之を刺戟獎勵するにあらざれば行はるゝこと甚だ困難なり。故に義務教育制度を實施する國家は大に意を圖書館の普及發達に用ゐて國民の自習自學に便し、且つ之を獎勵せざるべからず。然らざれば學校教育に對する努力も遂に徒勞に歸するの外なかるべし。

歐米の先進國に於ては義務教育は八年乃至十二年にして我國の如く僅に六年の短日月に止むるものなし、而かもその文字教育は甚だ簡易にして讀書力の養成も亦從つて甚だ容易なり。故に彼の國々に於ける義務教育修了者の學力は我國のそれに比して遙に優良なり。然るにも拘らず盛に圖書館を設けて國民の自習自學を獎勵し、國民をして絶えず向上發展せしめんことを期せり。

國民教育は教會を底邊とし、學校と圖書館とを他の二邊とせる二等邊三角形を畫くにあらざれば其目的を達すべからずとは、歐米先進國に於ける一般の輿論にして、國家及び社會が意を圖書館に用ふることは學校に對するに何等軒輕あることなし。

我國に於ては學校教育は近來長足の進歩を爲し、統計表の示す所によれば殆ど野に不學の兒童なき有様なり。然るも圖書館の施設に至りては殆ど言ふに忍びざるものあり。教に國民の多數は學校卒業と同時に圖書と絶縁し、壯丁検査の頃に至りては無教育者と何等選ぶ所なき者甚だ多し。此の如くにして世界一等國の地位を永遠に保持せんことを期す。難い哉。

我長崎縣は過去三百年間に於ける日本文化の中心地にして海外の文化は皆我長崎を経て輸入せられたり。我縣民が天下に率先して圖書館の普及發達の必要を唱道しその目的を達成して範を天下に示すはその祖先に對する當然の

責務といふべし。是れ吾人が長崎縣圖書館協會を組織して大方の贊同を仰ぐ所以なり。

本會規約

- 第一條 本會ハ長崎縣圖書館協會ト稱シ、事務所ヲ長崎縣立長崎圖書館内ニ置ク。
- 第二條 本會ハ圖書館事業ノ普及發達ヲ圖リ、國民教育ノ目的ヲ達成センコトヲ期ス。
- 第三條 本會ハ前條ノ目的ヲ達成スル爲メ、隔月一回講演會ヲ開キ、又時々會報ヲ發刊シ且ツ毎年一回總會ヲ開ク但必要ノ場合ハ臨時總會ヲ開クコトヲ得。
- 第四條 本會ニ入會セントスルモノハ、住所職業及氏名ヲ明記シ會費ヲ添ヘテ本會ニ申込ムヘシ。
- 第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク。

理事	若干名	内若干名ヲ常務トス
評議員	若干名	
書記	若干名	

- 第六條 理事及評議員ハ總會ニ於テ選舉シ、書記ハ理事之ヲ囑託ス但役員ノ任期ハ各二ケ年トス。
- 第七條 本會ニ顧問ヲ置キ。評議員會ノ決議ニヨリテ之ヲ推薦ス。
- 第八條 會員ヲ分チテ名譽會員、特別會員及ビ普通會員トス。

一、名譽會員ハ本會又ハ圖書館事業ニ特ニ功勞アル者ノ中ヨリ評議員會ノ決議ニヨリテ推薦シタル者。

一、特別會員ハ會費トシテ年額金貳圓ヲ本會ニ納入スル者。
 一、普通會員ハ會費トシテ年額金壹圓ヲ納入スル者。

第九條 退會セントスル者ハ、本會ニ届出ツヘシ

第十條 本會々則ノ修正ハ、總會ノ決議ヲ經ルヲ要ス。

附 則

會報ハ會員數六百人ニ達スルマデハ之ヲ發刊セズ、當分ノ間ハ長崎圖書館ノ承認ヲ得テ同館々報及ヒ藏書目錄等ヲ増刷シ會報ニ代ヘテ會員ニ頒ツ。

本會顧問

(いろは順)

橋本辰二郎 錦 織 幹 松田 精一 澤山精八郎

本會理事

(いろは順)

○飯田七三郎 ○市川庄次郎 岩永八之壱 伊集院清彦
 富田 雅次 ○唐仁原景盛 ○岡野 章太 大石榮三郎
 ○川 崎 升 ○龜井勝太郎 田崎 仁義 高見松太郎
 ○中山友次郎 ○中村 四郎 中川 觀秀 永見徳太郎

○永山時英 武藤長藏 ○村田直輝 増田廉吉
 ○宇土藤作 ○山田恒治 ○山口林一 淺田一吉
 ○福元岩吉 福田忠昭 古賀十二郎 雨森一郎
 淺田新太郎 淺山正名 ○岸 興 詳 ○北村重敬
 櫻井香織 佐藤眞穂 ○廣田直三郎 森 肇
 ○宮原宏平 ○志賀親久 ○宇野武男
 ○鈴木包教 ○印ハ常務

本會評議員

(いろは順)

林 源 吉 西村 慈 玠 新納 恒 壽 本田 英 作
 戸田 貫 一 陣内 惣 三郎 奥山 猛 彦 沖田 莊 藏
 岡田 省 胤 小川 水 路 大塚 惠 暢 長田 信 男
 上田 一 穂 米原 林 藏 田口 茂 助 宇野 治 清
 中津海 知 幾 梅田 廣 治 倉場 富 三郎 松本 二 三
 藤田 孫 太郎 寺 本 肇 荒井 第 二 郎 貞 方 猛
 三 隅 龍 城 瑞 穂 亮 爾 篠田 周 治 滋 賀 莊 三 郎
 重藤 鶴 太郎 白石 研 吉 森 徳 藏 持 永 實
 森本 七 郎 藤木 喜 平

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
有川	北魚目	平戸町	西有家	田平	南串	小長井	湯江	小江	深海	長田	水野	眞津山	古賀	戸石						
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	村	町	同	同	同	村	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
有川村	北魚目村	南松浦郡平戸町	北松浦郡西有家村	同	同	同	南高來郡南串山村	小長井村	湯江村	小江村	深海村	長田村	本野村	眞津山村	古賀村	戸石村	同	同	同	同
大正八年五月	大正七年四月	大正八年四月	大正十三年七月	大正九年一月	大正九年一月	大正八年八月	大正九年一月	大正九年四月	大正九年四月	大正九年三月	大正十二年四月	大正十二年三月	大正十年七月	大正十二年三月	大正十年三月	大正十二年三月	大正十二年三月	大正十二年三月	大正十二年三月	大正十二年三月
一〇〇	一八四	一一〇	一〇〇	一二〇	六〇	六〇	一〇〇	七〇	一五〇	一〇〇	七〇	三〇	三五	五〇						
一〇〇	一五〇	五〇	九〇	五〇	五〇	六〇	八五	六〇	一四〇	一〇〇	七〇	三〇	三五	五〇						
二一八	一、二四七	二、九一三	一七二	四五八	六八九	一三七	二二二	一一三	二六三	八二	三〇五	三四	三四九	一三一						
四、五〇〇	四、八九二	四、〇〇〇	四〇〇	二、二四一	一、〇六三	五、五一〇	二、七一	一、二四八	六、七二〇	一六、七八一	五、一五六	二、八〇五	四、八五六							
一、四	五、一	一五、二	四、〇	六、一	三、五	二、二	一一、九	三、五	二二、一	六六、五	四、二	一一、六	一三、七							
山口利光	宮田末八	廣瀬俊一	田中末藏	大島清	村上昇	赤司壽吉	管理着	本田規矩雄	同	岩松又太郎	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

同	同	同	同	同	併小學校 設立	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
田結	江之浦	有喜龜城	森山	小野	小栗	北高來郡	佐世	日宇	崎針尾	江上	早岐	廣田	宮村	波佐見						
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	村	村	町	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
田結村	江之浦村	有喜村	森山村	小野村	小栗村	北高來郡早町	佐世村	日宇村	崎針尾村	江上村	早岐町	廣田村	宮村	上波佐見						
大正十二年二月	大正九年七月	大正九年五月	大正十二年四月	大正八年五月	大正十二年三月	大正十二年四月	大正十二年三月	大正十二年四月	大正七年五月	大正七年六月	大正九年六月	大正九年三月	大正九年四月	大正十年四月						
五〇	六〇	六五	三〇	五〇	一〇〇	二二〇	二〇	七〇	七〇	五〇	四〇	二五	一	三〇〇						
五〇	六〇	六五	三〇	五〇	一〇〇	二二〇	二〇	七〇	七〇	五〇	三五	二五	一	二五〇						
三〇一	五八	三一八	一八六	二八二	二五九	五二二	一一三	五五二	三二二	二二三	四三二	一〇八	六六七	六〇四						
一、九九六	六、七八三	四、二六八	二、八九六	二、〇五一	一、〇〇六	一、一二五	八〇〇	四四五	一一、一九〇	四四二	二、二二三	三三二	二五一	五〇〇						
七、六	一九、一	一一、六	九、四	八、二	四、二五	三、二五	二、三	一、五	一四、〇	一、二三	六、七	〇、八八	〇、六九	一、三八						
小柳松榮	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

計	同	同	同	獨	同	附學	獨	同	同	同	同	同	同	同	同
菅邊	柳	財團法人沖	立北有馬	南有馬	設校	立愛野村	豐崎村	佐須奈村	仁田村	琴村	峰村	同	同	同	同
八四	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
者保護會	小邊	柳	北有馬	南有馬	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
邊村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村
年十二月	年八月	年四月	年一月	年一月	年一月	年一月	年三月	年二月	年一月	年二月	年三月	年三月	年三月	年三月	年三月
二八、八〇一	二〇〇		一、二四六	一〇〇	六五	一〇	一一〇			二〇	三四				
一、一八〇		三六八		六〇	四七	一〇	一〇〇			二〇	二〇				
一、一八九	五一七	六〇〇	一、三九一	二〇九	二九六	一六八	七四三	一〇二	三七	一四九	二二				
△七五二、一五六	二五、〇〇〇	三九七	五、五二四	二、四九〇	四四八	二〇〇	五、一二七		三三〇	一、三六〇	八六				
△四三五、一五一	六八		一七、	四、一五	三、〇	〇、五	一四		一	三	一				
	事務	西山喜衛門	沖壯藏	八木高次郎	田口鷹吉	中山鈔太郎	大浦	稻野爲美	小宮藤松	國分博	田口森臣				
	安永松五郎														

△印ハ回覽文庫ヲ示ス

同	同	同	同	同	同	併設 小學校 獨立	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
奴加岳村	仁位村	船越村	竹敷村	鶴知村	佐須村	豆酸	久田	嚴原	石田	鯨伏	大濱	本山	久賀島	奈留島	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
奴加岳村	仁位村	船越村	竹敷村	鶴知村	佐須村	豆酸	久田	嚴原	石田	鯨伏	大濱	本山	久賀島	奈留島	同	同	同
年十二月	年十二月	年十二月	年十二月	年十二月	年十二月	年十二月	年十二月	年十二月	年十二月	年十二月	年十二月	年十二月	年十二月	年十二月	年十二月	年十二月	年十二月
五〇	五〇	一〇〇	二〇	三〇	三〇	一〇〇	一二二	三〇〇	四〇	三〇	一三	八五	二〇	一五〇			
四〇	五〇	八五	二〇	三〇	二〇	一〇〇	一〇〇	一五〇	一〇	二〇	一三	七五	二〇	一五〇			
九〇	七三	三〇	三七	四〇	一〇二	五二	三〇一	五、四六八	五〇〇	一二八	三五〇	一八五	一二九	四四四			
四〇〇	一一〇	三六五	三六五	一、一〇〇	一五〇	一〇〇	四六〇	一三、九六五	五二〇	二、九三五	二一〇	二六四	三八五	一、九二五			
一	一	一	一	三	一	一	一	四、八	一、四	八	〇、八	〇、八	一、五	五			
青木久三	安藤信哉	井手軍作	熊生省三	松下和藏	井原勝利	長里恂	長信榮	鈴木格吉	藤江鶴春	林治助	額川兵太郎	藤田友太郎	吉田喜一郎	川崎幹			

耶蘇會年報を通して見たる長崎の開港

本會講演會に於て

永山時英氏口述

(一) 薩摩及び平戸の葡萄牙貿易

長崎開港の先驅者は葡萄牙玉ジョアン第三世が東洋に派遣した耶蘇會の高僧フランシスコ・シャヴィエルの流を酌む宣教師の一人であつた。そして長崎を開いて彌々世界的の港と爲したのも亦葡萄牙人の力であつた。それ故に長崎開港の由來を述べんとするには少くとも筆を葡萄牙人の初渡來に起さねばならぬ。

葡萄牙人の初渡來に就いては種々の異説がある。けれどもそんな研究は本講演の目的でないから、茲には先づ天文十二年種子島渡來説を正確なものとして置く。天文十二年(千五百四十三年)三人の葡萄牙人によつて、マルコ・ポロの所謂ジバング(日本國)が発見されたといふことが、同國人等の間に傳はるや、該國の商船は先を競ふて渡來し薩摩の坊ノ津、山川、鹿兒島等の各港は間もなくその貿易港となつた。

葡萄牙人等が天文十二年以來年々輸入した鐵砲でふ新銳の武器は我國の兵制に一大革命を惹起した。併し彼等が天文十八年を以て初めて輸入した精神的文化はそれ以上の大革命を我國の精神界に惹起した。抑葡萄牙國隆興の素因は久しくビレニース半島の基督教國民を苦めた異教徒に對する敵愾心であつた。そのアフリカ遠征の擧もイスラム教徒を征服して基督教を宣傳せんが爲めであつた。そのアフリカ迂回の計畫も亦その頃アフリカの南部には基

基督教國があるといふ傳説があつたので、それと聯合してイスラム教徒を夾撃せば妙ならんとの考から生れたのであつた。されば葡萄牙の探檢隊には必ず宣教師の傳道隊が附隨しな。商權の擴張及び國土の侵略と基督教の宣傳とは何時もつきものであつた。我日本の場合も亦決してその例外ではなかつた。

天文十八年七月三日、即ち西曆紀元千五百四十九年八月十五日、マリア昇天の日を以て、耶蘇會の高僧フランシスコ・シャヴィエルはバードレ・コスモ・デ・トルレス等を従へ、鹿兒島人半次郎を案内者として鹿兒島に渡來した。

當時薩摩は今尚ほ薩人から武士道の權化と仰がる、日新齋島津忠良在世の時で、その子貴久が太守の職に備はり盛に禪儒の二道を奨励して武士道の養成に力を用ゐつ、ある時であつた。薩人等はシャヴィエルが印度から來たに聞いて、その説く所も佛教の一派なるべしと考へたので、始は寧ろ之を歡迎して何等の隔意なく應接した。然るにシャヴィエルは絶對的に他宗を排斥し、正面から猛烈に佛教を攻撃し、薩人等の師事せる禪僧等に對しても憚る所なく痛罵を加へた。自然の結果として薩の有力者は皆シャヴィエルに對して反感を懷くやうになつた。布教の成績も亦従つて思はしくなかつた。そこでシャヴィエルは遂に薩摩を去つて其頃葡萄牙船が新に出入することとなつた平戸に移ることに決心した。かくて彼はコスモ・デ・トルレス等を従へて鹿兒島を發し、川内の方面に向つて進み、途中イカン殿の城(市來城であるといふ説があるが不明である)に立寄つて多少の收穫を得たる後、川内河口から舟に乗つて、天文十九年の九月、平戸に到着した。コスモ・デ・トルレスは翌千五百五十一年(天文二十年)九月廿九日附、山口發の書翰の一節に。

バードレ・メストレ・フランシスコは常に慈悲の火に燃ふるが故に、我等が大なる効果を擧げざるを見て、更に百

レグワを距てたる平戸と稱する地に移る事になった。

と述べて居る。之によればシャヴィエルの薩摩を去つたのは一般に信ぜられつゝ、ある如く、退去を命ぜられたのでなく、布教の成績が思はしくなかつた爲めであつた。

シャヴィエル平戸著の當時、平戸には二ヶ月前から碇泊して居る一隻の葡萄牙商船があつたが、葡萄牙人等はその來着を聞て大に喜び、祝砲を放つて盛に歓迎の意を表し、その松浦氏を訪問するや、儀仗兵を上陸せしめて威儀を整へしめた。これは松浦氏をしてシャヴィエルを尊崇するの念を發せしめ、その布教上に利する所あらんとしたのであつたが、松浦隆信もその意中を察して之を歓迎し、請にまかせて領内の布教を許した。

シャヴィエルは薩人の彼に對する待遇を非常に不快に感じつゝ、あつたので、その怨を報ふるに全時に宗教家の威嚴を示すは此時に在りても考へしにや平戸到着早々葡萄牙商人等に説いて薩摩貿易を停止せしめた。かくて平戸が獨り葡萄牙貿易の利を占むること、なり、薩摩の葡萄牙貿易はシャヴィエルの一言によつて遂に終焉を告げた。

平戸の布教はその初め好成绩であつた。併しその他宗排斥振りが依然として絶對的で、而かも甚しく猛烈であつたので、間もなく佛基兩教徒の間に烈しい軋轢が始まつた。松浦氏の重臣等も兩黨に分れて互に鏑を削つた。そして遂には兩黨各武器をこつて相戦はんとするに至つたので、松浦隆信は大に之を憂へ、永祿元年(千五百五十八年)遂に宣教師等に諭して領外に退去せしめた。是から宣教師等は松浦氏に對して痛く不快の念を懷くやうになつた。然るに永祿四年に至り、平戸貿易の爲めに更に一層悲むべき一大事件が起つた。それは葡萄牙商船の或水夫と平

戸の或町人との間の喧嘩が本になつて、言語不通の爲めに一大争闘が始まり、葡萄牙船の船長以下十四名の葡萄牙人が爲めに非命の死を遂げた一件であつた。

松浦隆信はこの悲むべき一事變の爲めに葡萄牙貿易に障害の起らんことを恐れ、書を豊後なる耶蘇會の長老コスモ・デ・トルレスに送つて、大に辯疏に努め、平戸に會堂建設のことを約して、トルレスに葡萄牙商人の慰撫方を依頼した。併し大村純忠の機敏な運動が効を奏して隆信の苦心を水泡に歸せしめ、葡萄牙貿易は遂に大村領内に奪はるゝことになつた。

(二) 横瀬浦の葡萄牙貿易

大村侯大村純忠は夙に葡萄牙船を領内に誘致せんとするの志があつたが、永祿四年(千五百六十一年)に至り平戸に不祥事件が起り、葡萄牙の商人や宣教師なきが、大に松浦氏に對して不平を懷くに至つたといふ情報に接したので、同年の冬書を豊後なる耶蘇會の長老コスモ・デ・トルレスに送り、之に喰はすに利を以てして、葡萄牙商船の誘招を試みた。千五百六十二年(永祿五年)十月廿五日附、イルマン・ルイス・ダルメイダの書翰によれば、純忠のこの時の書面の内容は大略左の通りであつた。

大村純忠は尊師がイルマン一人を大村に遣はして眞の神の道を傳へしめられんことを希望する。若し此願叶ふに於ては予は數ヶ所に會堂を建て、その經費に充てん爲めに、横瀬浦と其の周圍二レグワの地をその農民と共に貴教會に寄贈し、且つ同港内には宣教師の意志に反して異教徒の在留を許さざるべし。そして葡萄牙船が同港に

入津して貿易すること、ならば、それと貿易せんが爲めに來り集る商人に對しても亦十年間を限り、總ての課税を免除することを約束する。

コスモ・デ・トルレスは之を見て大に喜び、先づイルマン・ルイス・ダルメイダを横瀬浦を経て大村に派遣し、大村氏と談判して各種の準備を整へしむること、し、己は平戸に赴いて、其頃渡來した葡萄牙船の船長に説き、遂に平戸を去つて横瀬浦に移らしめた。そして彼自身も亦この葡萄牙船で横瀬浦に至り、天村氏との約を堅め、會堂や住宅などを同港に建設して、日本傳道の根據地と定めた。是時大村氏は右の書面中に掲げた總ての條件を實施することを承諾したが、領地の件のみは大村氏と教會と半分宛之を領することにしたとダルメイダは報告して居る。

會堂や住宅などの建築については、大村氏は森林を寄附して大に之を援助したので、これ等の設備は間もなく出來上り、葡萄牙船は相踵で入津するやうになつたので、四方から商賈や吉利支丹等が集つて横瀬浦は俄に、ぎやかな港となつた。

純忠はこの有様を見て大に喜び、しばし横瀬浦を訪問してトルレス等の教を受けたが、永祿六年に至りては、遂に重臣二十五人と共にトルレスから洗禮を受け、教名をドン・ペルトラメウと稱した。

大村純忠は横瀬浦開港以來痛く基督教に心酔し、絶對的に他宗を排斥して佛教の像などは布教の障害物として悉く之を破却するの方針をとり、永祿六年の于蘭盆の時には、大村家歴代の靈牌をも之を火中に投ずるに至つた。老臣等の内には早くから純忠の舉動を快とせぬものが多かつたが、是に至つてはその餘りの暴舉に憤慨し、歴代主家の

の尊靈に對して最早黙視すべからずとなすに至つた。そして純忠が大村家の出でなく、大村家の先代大村純前には庶長子貴明といふものがあつたにも拘はらず、之を出して後藤氏を繼がしめ、純忠は有馬晴純の第二子を以て入つて大村家の正統を嗣いだものであつたことが、老臣等の反感をして特に深からしめた。そこで吉利支丹反對黨と貴明擁護黨とは期せずして同一の行動をせむることになり、純忠を廢して、貴明を擁立し、コスモ・デ・トルレスを殺して、基督教の宣傳を防止せんとするの陰謀が企てらるることになつた。

此陰謀は永祿六年八月十七日を以て愈決行せられた。先づ純忠にすゝめてコスモ・デ・トルレスを大村に招かしめ、兵を二手に分ち、一手は横瀬浦街道に出で、トルレスの來るを待ちて之を殺し、一手は直に大村城下に迫り、純忠を幽閉し貴明を擁立せんとするのが謀反の筋書であつた。然るにトルレスは故あつて純忠の招に應じなかつた爲めに、幸に其の難を免れたが、純忠は事俄に内部から起つて、施すに策なく、僅に身を以て遁るゝの外なかつた。

反徒の一隊は進んで横瀬浦に至り、火を放つて之を焼いた。トルレス等の努力によつて出來上つたばかりの會堂や、軒をならべた商家なども、皆一朝にして烏有に歸し、トルレス以下の宣教師や、葡萄牙人などは皆葡萄牙船によつて難を他に避けた。

かくて大村領内では吉利支丹反對黨が大勝利を得て、其の勢が甚だ盛になつたので、純忠はその後、父有馬晴純の援によつて、漸次反徒を鎮定することが出來るやうにはなつたけれども、吉利支丹反對の氣勢は猶ほ領内に横溢して、永祿八年に至るまでは、さすがのコスモ・デ・トルレスも大村領内の布教は之を斷念するの外はなかつた。何となれば若し宣教師が大村領内に踏入るに於ては、純忠の身邊が甚だ危険であつたからであつた。

右の加き有様であつたから、其後一時葡萄牙船は心ならずも再び平戸に入津したが、永祿八年に至り、純忠が漸次その勢力を恢復するに及び、彼が多年葡萄牙商人や宣教師などに對して表した所の好意は遂に酬られて、葡萄牙船は再び彼の領内に入津することになつた。

(三) 福田浦の葡萄牙貿易

横瀬浦全滅後、大村領内では吉利支丹反對黨の勢力が甚だ盛であつたので、葡萄牙商船は再び平戸に入津することになつた。そこで、それ見たことか云はんばかりに松浦氏の宣教師等に對する態度は頗る冷淡であつたが、永祿八年に至りては聖像侮辱事件などがあつて、益宣教師等をして憤慨せしめた。會々ジョアン・ペレイラの船長たる一隻の葡萄牙商船が平戸港外に來着したので、バードレ・バルタザル・ダ・コスタは書面をペレイラに送つて松浦氏の背信行爲を告げ、俄に方向を轉じて大村領なる福田港に向はしめた。松浦隆信は大に怒り、兵船五十隻に命じて之を遣はしめ、平戸につれ還らしめんと試みた。然るにペレイラは頑として之に應せず、遂に干戈を以て相見ゆることになつたが、當時の葡萄牙船は商船とは云ふ條、立派に武装した軍艦で、海戦にはなれて居たので、平戸の水軍は遂に二百六七十人の死傷者を出して退去するの已を得ざるに至つた。

かくて葡萄牙商船が再び大村領内に入津することになつた爲めに、大村純忠は大なる利益を收むることが出来て大に勢力を恢復し、領内もそれが爲めに漸次鎮靜するに至つた。是より先き大村純忠は絶えずコスモ・デ・トルレスに音信を通じ、時に宣教師の派遣を乞ふたこともあつたけれども、トルレスは宣教師の派遣が却つて大村領内に

反亂を挑發せんことを恐れて之に應じなかつたが、是に至つて初めてバードレ・ベルシヨール・デ・フィゲイレド等を福田に派遣し、イルマン・ルイス・ダルメイダは大村を訪問した。フィゲイレドは千五百六十五年(永祿八年)十月二十二日附、福田發の書翰でその時の事情を大略左の如く報告して居る。

ドン・ペルトラメウの臣下が彼に叛きたる後、彼に對して起つた二年間の大戦争中我等の主は特別の恵を以て彼を保護し給ひ、彼をしてその領土の大部分を征服し、再び其國を領せしめ給ふた。(中略) ラドン・ジョアン・ペレイが船長たる定航商船が、本年支那から來たが、葡萄牙人等は皆ドン・ペルトラメウを助けんと欲して其港に入つた。之に依り彼と其の領土とは大なる利益を得、その敵は商船がその船に來ない爲めに、大なる損失を蒙つた。かくして大村領内は漸次鎮靜し、平和に復歸しつゝある。

此海岸地帯は最も平穩で、ドン・ペルトラメウは予を其地に入らしむることが出来たので、バードレ・コスモ・デ・トルレスは今滞在するこの港(福田)に予を派遣した。

ドン・ペルトラメウは其後數回來訪し、沿海諸城の吉利支丹の君並に他の吉利支丹等も亦此地に來つて、予等の此地に來たことに對して満足の意を表した。

此頃イルマン・ルイス・ダルメイダは日本人イルマン・ロレンゾと共に大村にドン・ペルトラメウを訪問せしに、大なる満足をして迎はられた。

かくて永祿八年以降大村領の海岸地帯へは宣教師が段々入込んで布教するやうになつたけれども、その内地では反對黨の勢が尙盛で、永祿十年に至りても布教を開始する譯に行かなかつたやうである。それは千五百六十七年

(永祿十年)十一月廿二日附、ロノ津港、イルマン・ミゲル・バズの手紙に左の一節があるので明である。

ドン・ペルトラメウの領内は略平靜に歸したので、本年中屢其領内に於て信仰を説くべき人を派遣せんことを要求した。

そしてドン・ペルトラメウは自らロノ津に來りてバードレ・コスモ・デ・トルレスを訪問し、既に信仰を解せる者に洗禮を授くる爲め、バードレ一人を彼の一行と共に出發せしめんことを乞ふた。それでイルマン一人が彼の地に赴いて多數の人に宗教問答を授けたので、彼等は今毎日洗禮を受けんとて待つて居る。

(四) 長崎の基督教布教開始

右に述べた如く、永祿十年(千五百六十七年)に至りても、吉利支丹反對黨の勢が尙ほ盛で、大村の町にはまだ布教を開始する譯に行かなかつたが、長崎の町に於ては是歲イルマン・ルイス・ダルメイダが長老コスモ・デ・トルレスの命を奉じて傳道を始めた。千五百六十八年(永祿十一年)志岐發、イルマン・ミゲル・バズの書翰に左の一節があるのは之を證するに足る。

バードレ・コスモ・デ・トルレスは昨年イルマン・ルイス・ダルメイダを長崎に派遣した。その地の領主はドン・ペルトラメウの臣下で、已に吉利支丹であつたが、イルマンは同所で多數の吉利支丹を得た。バードレ・ガスバル・ヴイレラは同じ頃平戸に派遣せられた。

全年イルマン・ルイス・ダルメイダが日本から司教ドン・ベルシヨール・カルネイロに贈つた手紙には長崎の布教狀

況を左の如く述べて居る。

ドン・ペルトラメウの臣下の領地なる長崎に於ては、數回同地に赴きたるイルマン等、當冬我等の主の爲めに大に盡すことを得た。同地の名譽ある者一同が五百人の平民と共に我聖數に歸依し、信仰を持續して、好き生活の模範と良き風習とを示した。此附近に數ヶ所の小村があるが、こゝにも多數の吉利支丹があつて、長崎の會堂來る。

永祿十一年には大村領の内地も漸く鎮靜に歸し、大村の町でも布教することが出来るやうになつたと見えて、コスモ・デ・トルレスが自ら大村に純忠を訪問し、遂に留つて大村に會堂を建て、布教に従事することになつた。

千五百六十九年(永祿十二年)八月十五日附、日本發、名の知られざる一葡萄牙人より本國の耶穌會に送つた手紙れそのことを左の如く述べて居る。併しその文句を精細に閱讀すれば大村の吉利支丹反對黨の勢力が尙ほ相當強かつたといふことを推知するに足るものである。

コスモ・デ・トルレスが福田から大村に赴いてドン・ペルトラメウを訪問するや、彼は評議會を開き、「コスモ・デ・トルレス師は、余が過日師を福田に訪問した答禮の爲め、此度當地を來訪せられた。師は直に歸りたいと云はるけれども、余は汝等と共に師に長く大村に滞留せられんことを乞ひ、會堂の敷地をも寄附したいと思ふが汝に等の意見は如何。」と諮つたので、一同も之に賛成し、共に共に師に大村に留まられんことを乞ふた。依てトルレスは長く大村に留まることになつた。

かくして永祿十一年からコスモ・デ・トルレスは會堂を大村に建て、布教することになつたが、大村の形勢はトル

ルスに對して尙不利であつて、トルレスの滯留は反亂の因ならんことを、元龜元年(千五百七十年)にトルレスは長崎に移るこゝになつた。去りながら長崎に於ける布教は頗る順調に進行し、永祿十二年にはトドス・オス・サントス寺も建立さるゝこゝになつた。カスバル・ヴィレラは千五百七十一年(元龜元年)二月四日附、コチン發で本國耶蘇會にの送つた手紙の一節に、その時の事情を左の通り述べて居る。

復活祭(千五百七十年)の後大村に異教徒の叛亂が起つて聊か不満なりとの報を得た。事の起りは長老コスモ・デ・トルレスが大村に在る爲めであつたので、長老及び、ドン・ベルトラメウは長老が大村から長崎に移り、彼の地の靜平に歸するを待つが得策であるを考へたので、復活祭の終りたる後、長老は予の居つた長崎にやつて來た。

(五) トドス・オス・サントス寺の建立と當時の長崎町

長崎に於ける基督教の傳道が永祿十年(千五百六十七年)に始まつたことは既述の通りであるが、同十二年(千五百六十九年)にはバードレ・カスバル・ヴィレラが來て布教に努め、初年度に千五百人の信者を得て之に洗禮を施し領主長崎甚左工門から貰つた佛教の寺院を改造して會堂を建て、之をトドス・オス・サントス(總ての聖人)に獻じた。是れが即ち長崎の舊記に所謂トードノサンタ寺で、今の春徳寺の地に在つたと云はるゝものである。

カスバル・ヴィレラは日本から歸國の途次、千五百七十一年(元龜二年)二月四日附を以てコチンから書を本國に送つて、日本滞在中のこゝを報告したが、その一節に長崎のこゝを左の如く述べて居る。

予は千五百六十九年(永祿十二年)から千五百七十年(元龜元年)まで二年間長崎に居た。此町はドン・ベルトラメウの臣下なる吉利支丹武士の所領で盛大な町である。予が到着した時、彼は會堂となす爲めに一の寺院を興へて、予を之に宿泊せしめた。併し予は之に收容すべき吉利支丹が出来るまでは之を改造することを見合せ、先づこの地の異教徒一同を集めた。彼等は第一回の説教では餘り喜ばなかつたけれども、予は神の御慈悲を信じ、第二回の説教に彼等を招きしに、我等の主は大に彼等を導き給ひ、盛に談話や質問などを試みた後、眞理を悟り、愛の心を以て納得した。予は二百人又は四百人宛數回に洗禮を授け、初年に千五百人に達した。そこで千五百六十九年(永祿十二年)彼の武士から貰つた寺院をとりくづし、貧弱なれども甚だ麗はしき會堂を造り、之をトドス・オス・サントスに獻じた。是によつて諸人の信心が増し、彼等は彼等を生來の暗黒界から救ひ出したる恩恵に對して主を稱讚し、感謝の誠意を表する爲めに悉く此地に在る佛教の寺院を破壊した。

右の記事中(一)永祿十二年(千五百六十九年)の頃長崎が既に盛大な町であつたといふこと(二)トドス・オス・サントス寺は永祿十二年に佛教の寺院を改造して建立したものであるといふこと、(三)全年の頃長崎の佛教の寺院は已に吉利支丹の爲めに悉く破壊されたといふこと、(四)長崎の領主(長崎甚左工門?)は長崎に基督教の布教が始まらぬ前から已に基督教に歸依して居たといふことなどは、從來の傳説とは大に異なる所で、注目に價する點である。

永祿十二年の頃長崎は已に盛大な町であつたといふバードレ・カスバル・ヴィレラは云ふて居るが、その所在は今何所であつたらうか。從來の傳説によれば領主長崎甚左工門の居城は今この城の故趾に、トードノサンタ即トドス・オ

ス・サントス寺は今の春徳寺の境内に在つて、今の櫻馬場の邊には長崎氏の重臣の邸宅がならんで居たといふことである。そうすればヴィレラの所謂長崎町は今の櫻馬場附近ではなかつたらうか。

長崎の町が今の櫻馬場附近であつたといふれば、海岸に近い今の長崎市が目貫の場所は、その頃は多くは海又は淺瀬で、その他は長崎の舊記に見ふる如く葦原や塩濱なごばかりで、貧弱な漁家がその間に散見する位の淋しい漁村であつたであらう。

永祿十年(千五百六十七年)にイルマン・ルイス・ダルメイダが長崎の布教を始めてから元龜元年(千五百七十年)に至る迄四年の歳月を經過したるのみならず、長崎港口なる福田には永祿八年以來年々葡萄牙船が渡來して貿易を營みつゝあつたのであるから、葡萄牙商人等が長崎を知らぬ譯はないけれども長崎の海岸地帯が右に述べた如き有様であつたから葡萄牙人等も長崎の良港たることに一寸氣がつかなかつたのではあるまいか。

去りながら長崎は天然の良港である。風波をさげ防ぎ得ぬ福田とは到底同日の論でない。人為的の缺陷は機會さへあれば直に之を改良することが出来る。何時までも長崎の如き良港が知られないで終る道理はない。果して時は來た。元龜元年長老フランシスコ・カブラルの長崎渡來は遂に長崎の良港たることを廣く葡萄牙人に紹介した。人為的の缺陷は直に改良せられた。そして翌元龜二年から長崎葡萄牙商船の貿易港となつた。

(六) 長崎の開港

従來の傳説では、元龜元年(千五百七十年)に葡萄牙船が始めて長崎に入津し、その良港たるを知つて、翌年から毎

年入津する旨を約し、旅館其他の準備を領主長崎甚左工門に依頼したので、甚左工門は之を其主大村純忠に告げ、協議の上今の長崎縣廳所在地に附近に六ヶ町の市街地を劃し、大村、島原、平戸、横瀬浦其他の地方から商人を招き、家を建て、旅館や商店なごを設けしめしに、翌元龜二年から葡萄牙船が果して年々渡來して貿易を營むことになつたといふことになつて居る。此傳説は當時の吉利支丹伴天連なごの報告書に參照しても事實に近いものがある。

當時日本に在つた、宣教師等の報告書に依れば元龜元年(千五百七十年)月耶蘇會のバードレ・フランシスコ・カブラルは老長老コスモ・デ・トルレスに代らんが爲めに志岐に渡來し、長崎から行いて彼を出迎へた老長老トルレスに代つて長老となり、全國の宣教師を全地に集めて協議を遂げた後、福田を経て長崎に渡來した。大村純忠はカブラルの渡來を聞き、之を長崎に出迎へて遠來の勞を慰した。此時カブラルはどんな船で來たか、又何人を伴ふて來たか明でないけれども、去永祿十一年にコスモ・デ・トルレスが久し振に大村に大村純忠を訪問した場合にも、多くの宣教師や葡萄牙人なごが之に隨行したことが見て居る。況して此度は初渡來の長老が、初めて日本に於ける基督教の柱石たるドン・ベルトラメウを訪問するといふのであるから宣教師等は勿論、福田に碇泊中の葡萄牙船商人等も多くの之に同伴したものと考ふべき理由がある。或は態々葡萄牙商船を以て堂々長崎まで見送たつかも知れぬ。そして一國の主たる大村純忠が態々之を長崎まで出迎へるといふのであるから、大さわざであつたに相違ない。後の歴史家が葡萄牙船初めて長崎に入津すと特筆したのも無理からぬことである。かくて多くの葡萄牙人が長崎に渡來し、實地を詳細に觀察した結果、少し手入れをすれば他に比類なき立派な貿易港となることが明になつた以上、

その設備について依頼する所のあつたことも想像するに難からざる所である。

されば傳説にある如く、元龜元年に葡萄牙人の依頼に應じて、今の縣廳附近に六ヶ所の市街地を劃し、附近の商人を誘招して、家を建て、旅館などを設けて、貿易開始の準備をなしたといふことは事實であるに相違ない。

千五百七十年(元龜元年)十月廿一日附、福田發、バードレ・ベルシヨール・ト・フイケイレドから本國の耶蘇會宛の書翰の一節にカブラルの長崎渡來のことを左の如く述べて居る。

バードレ・フランシスコ・カブラルの渡來により予等は志岐の町に彼と會見した。(中略)カブラルは宣教師等が各その任地に向つて出發した後、商船の碇泊する當港(福田)に來た。(中略)カブラルは當地からドンベルトラメウを訪問して敬意を表する筈であつたが、ベルトラメウは挨拶の使を出すことに於ても、又自ら訪問することに於ても悉くカブラルに先んじた。カブラルは長崎の町でドン・ベルトラメウに會見した。(中略)此間にカブラルが大村に行つて純忠の夫人、嗣子及び二人の娘に洗禮を授けたことが書いてある。福田に碇中の葡萄牙船の司令官を始め、全地在住の吉利支丹等は之を聞いて大に善び、祝砲を放ちて之を祝した。そして司令官は葡萄牙人等と協議の上、二人の代表者を大村に派遣し、鄭重なる贈物を齎らして之を賀せしめた。

翌元龜二年(千五百七十二年)からは葡萄牙船が愈長崎港に入津して貿易を營むことになつた。そして之と全時に長崎は吉利支丹の避難所となつたので、その人口が著しく増加し、俄に賑な貿易港となつた。

千五百七十一年十月八日附、志岐發、イルマン・ミゲル・バズ書翰の一節に其時のことを左の如く述べて居る。時節到來して支那から商船及びジャンク船一隻が長崎と稱するドン・ベルトラメウの新しい港に着いた。此港には虐待の上追放せられた吉利支丹等も來り集つたので本年多數の人口を得た。

終